

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年二月廿日印刷
昭和十三年三月一日發行

第四卷 第三號

浄土

吉田絃二郎氏每號執筆



三月號

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が學つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。
讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩譽の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

改增
訂
版補

信仰讀本

錢三十二 定價 頁〇八版六四 付名假りふ總 著康辨村中

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を打開く。『淨土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾八錢
學教授 七〇頁送料共
法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するが、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫻々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかない。

◆ 會仰鑽人上然法 所行發 ◆



◆ 浄土 第三四卷 三月號 目次 ◆

表紙……………井上正春
扉繪……………樹下行雄

名士
說苑

必勝の信念

本野久子

隨想

犬・猫・人間・佛

佐藤賢順 (三)

隨筆淨土

水鶏 笛

吉田絃二郎 (三)

露宿 片片々

子母澤寛 (四)

知恩院詣で

岡本かの子 (五)

私の負傷記

從軍僧

中野隆雄 (六)

東洋平和のためならば

白崎嚴成 (八)

信仰
座談

眞人生の誕生

中野尅子 (四)

童話

見なかつたアブネル

中條一夫 (五)



家庭と 婦人

新時代の女性美

大橋りゆう子 (哭)

歴史
小説

静

御

前

今野賢三 (哭)

讀物

地藏尊由來記

小島健三 (哭)

短編

出陣

飯田光明 (哭)

笑話

ムツソリーニの言葉

(二)

主婦必讀
勤行のすゝめ

(哭)

新時代の女性へ

(哭)

與謝野晶子・岡本かの子・新居格・生田花世
高神覺昇・岩野喜久代・相馬黒光

法語
解説

かりそめの戀にも

中村辨康 (哭)

歌
俳

壇

與謝野晶子 (哭)
太田耳動子 (哭)

鑽仰運動ニュース
編輯部だより

(哭)

◇ 淨

土

第四卷
第三號

三月號

目次

◇

大正大學
長
衆議院議員
文學院博士
共生會々長

椎尾 辨匡 先生 著

四六版
定價 二百八拾圓
送料 八拾圓
總發行所 錢錢本

椎尾先生還曆記念講演

新刊

生きる御國

(正法王國の擴充)

—— 愈々發刊さる ——

その名、生きる御國！ 我が日本精神こそは素朴にして明朗なる古代日本民族の精神生活に、深遠にして廣濶たる佛教精神を主流とする東洋思想の交流に依つて成立した。本書こそは日本民族精神の生ひ立ちより、此れを基調とする此の國の産業、家庭、國家生活の過去に於ける姿より説き起し當に世界に雄飛せんとする日本民族の行進目標として、平易簡明に説かれたる斯界の權威椎尾博士の還曆記念講演集！！ 加ふるに支那事變に對する高見を増補し點晴の書となす。

目次

- 一、正法王國の沿革
- 二、生きる國
- 三、黎明を告ぐる日本
- 四、極樂日本
- 五、業務への進み
- 六、正法王國建設運動
- 七、正法興隆
- 八、日本佛教信仰の發展
- 九、國體と淨土教
- 一〇、現代に於ける正法王國の擴充
- 一一、正法王國躍進の秋(時局論)

日振替 本橋區室町四近三ビル内
振替 東京 七〇五番

發行所 共生會出版部



淨土

三月號

さへられぬ光もあるを

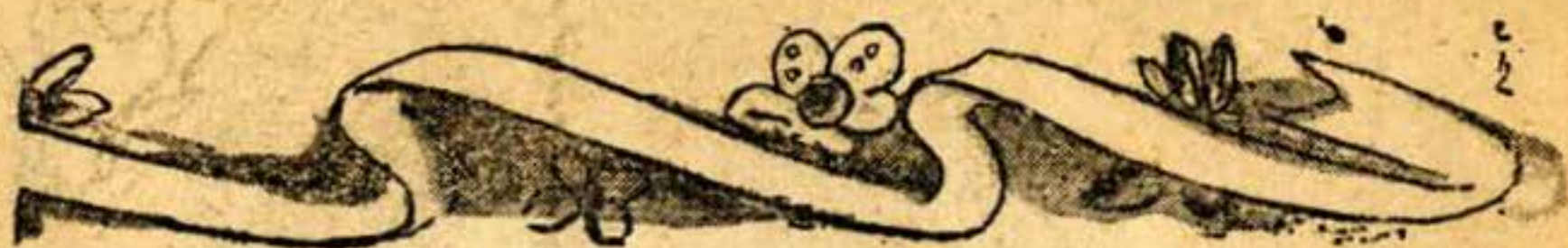
をしなへて

へたてかほなる

あさかすみかな

法然上人詠歌





必 勝 の 信 念

愛國婦人會長 本 野 久 子

日支事變も首都南京の陥落に依つて一段階を了へ、今や我が國は、次ぎに來るべき試練に向つて、官民一致國を擧げて工作準備をすゝめてをります。我が日本が如何なる危機に直面してゐるか？ それは既に日々の新聞紙上にて御承知のやうに、ソ聯はもとより、英も、米も、我が日本を假想敵國として自國の軍備擴張をすゝめてをります。また、列國の經濟上の壓迫は、日にく私どもの日常生活に強い影響を與へて行きます。實に私ども昭和の國民は、日本開闢以來稀なる危機に立つてゐるのであります。然るに、かほどの危機に立つにも拘らず、尙、私どもが日常平和に過してまゐれますのも、これ、偏に、上天皇陛下の稜威と、我が皇軍將兵の方々の類なき武威によるものではあります。併し銃後の國民たる私どもは、それだからとて安閑といたしてをつては、申譯ない次第であります。戦時體制下の高い税金を拂ひ、或はせいゝ奮發して愛國公債を買ふ程度にて御國に御奉公を了へたと安んじてゐられるべきではありません。私どもも、東洋永遠の平和を確立すべく、銃なくして戦ふ一戦闘員であるといふ自覺を、はつきりと持つべきであります。この自覺の下に、國民一人々々が、算盤をとり、ハンマーを振り、蹴を擔いでその生業を勵んだならば、國力は更に増大され、武力は益々光輝を添へませう。私どもは、我れも亦戦闘員なりといふ自覺をしつかりと心に抱き、沈着に、冷靜



に、寸時を惜しみ一錢を蓄へて、その時と金のすべてを銃後の護りに捧げるべきであります。

併し乍ら、何事をなすにも一個人の力には限度があります。銃後の國民として最も力を注がなければならぬ出征軍人家族の生活扶助の問題にいたしても、たとへたつた一軒の御家族にしる、個人の力で徹底させることは、到底不可能であります。併し隣人が十人なり二十人なり相寄つて、力を併せますれば、不可能事と雖も容易に成就し得るのであります。それと同様に、學校なり、工場なり、或は一宗教のグループなりの個々の方々が相集つて力を併せれば、かなりな困難事も、成し了せるのであります。千人針の帶五千本を五日間で縫ひ上げた女學校もあります。一千の五千倍は五百萬針であります。五百萬度、一人の女が針を動かすことは幾月を要するか想像もつきません。併し、多數の女が協力すれば立ちどころに縫上げることが出来るのであります。政府に於かれましても、夙に國民精神總動員を提唱されまして、一億の國民に結束を要望されてゐるのであります。私どもは、各自の個々の心と力を衆と俱に併せて、難局打開に邁進すべきであります。

而して、終りに一言申し添へたいことは、この長期に渉るべき國難に向つて、私どもは、最後まで、倦まねざることです。一事をしてその有終の美を濟さしめるや否やは、『物』に非ずして『心』にあります。精神が力を生じるのであります。『必勝の信念』は、人力の爲し能はざることを爲し、『勝たざればやまじ』の精神は、凡ゆる困苦に堪へ、無より有を生む原動力となるのであります。私どもは北支、江南の野に散つた幾萬の英靈をして、無爲なる犠牲と終らしめてはなりません。殉國の士の志を完からしめるや否やは、一に、私ども残されたる國民の覺悟と力に懸つてゐるのであります。私どもの生れ合せたこの昭和の御代をして後世永遠に光輝あらしめ、この御代に一大飛躍を成就せしめることこそ、私どもに課せられたる光榮ある使命であります。宗教こそこの信念の基礎をなさねばならぬと思ふのであります。



露宿洞片々

子母澤 寛

一

利休の歌に「茶の湯とは、たゞ、湯をわかし茶をたてゝ、のむばかりなることゝ知るべし」といふのがある。わたしの弓の先生大平射佛氏は「弓をひくには、何事を思つても、爲てもならない。空身物外だ」と教へ「わたしは、この頃になつて、はじめて、本當にそれがわかつて來た」といつた。

大平氏は弓をとつて五十幾年はじめてこの心境を得られた。

利休も恐くは幾十年の苦しみの後に得られた心境であつたらうわたしは、常にさうした心境を望んで、しかも尙ほ道は遙かであることを知つて悲しむ。

利休の如く、大平先生の如く、大道に安住せば、その穩やかさはどうであらう。敵を知り、怒りを知り、争ひを知る。わたしは、時々自分自身の淺ましさに泣くのである。

二

わたしの知つてゐるあるみ佛に信仰の篤い親分が、渡世の上から人に殺された事がある。晝寝をしてゐるところを突然脇腹へ、短銃を射たれたのであつた。親分は、自動車で病院へ送られた。妻女と重立つた子分がついてゐた。「苦しくはありませんか」妻女は幾度もきいた。親分はあり／＼と苦痛の色を見せながらも、その度に「痛くアねえ。」と云つた。

二十分ばかりも車が走つてから「ここは何處だ」ときいた。子分はすぐに「何處そこです」と答へた。「さうか——やつと細張の土地を出たんだな。それでいゝんだ。おう、俺に唸らせてくれろ」といつて、その時にはじめて、やがて、三十分後には絶命する苦しい唸聲を立て、「痛てえ、俺ア助からねえ」と悲痛な聲をふり絞つた。

わたしはこの話をきいた時、何かしら泣けてならなかつた。
「あの親分も立派な人であつたが、もう一と息、本當の人間をつかめなかつたのだ。射たれてすぐ、痛い苦しいと云へ得たら、あの人の最後の一時間は、あんなに苦しいものでなかつたであらう」と思つたからである。

親分は、弓ならばそこに工夫があり技があつた。茶の湯ならば、矢つ張りふくさ捌きを氣にし、取締ひを氣にし終つた。最後まで空身物外の境地に立つことが出来なかつたのであらう。

三

わたしは或所へ犬を見に行つた事がある。夫婦の可愛い、芝犬であつた。

わたしは、すぐに、その犬たちへ手をさしのべて「來い、來い」といつた。牝犬が尾をふつて先きへ來てわたしの指先きを嘗め、つゞいて牝犬が來て、同じ事をした。丁度そこへこの犬の持主が來て、いきなり「危ないッ」といつたのである。

わたしは驚いてその理由をたづねた。

「この犬はどんな人にでも噛みつくのです。殊に牝犬がその人へ近寄ると、牝犬が嫉妬して大變なのですよ。」「そうか」

わたしはこの犬たちが恐ろしくなつた。そして、しばらくし

て歸り際に、もう一度、今度は非常な警戒心を持ちながら、その犬たちの前を通つて「來い、來い」といつて見た。

しかし、犬たちは、わたしの側へ來るところか、牝犬は元より殊に牝犬は、白い牙をむき今にもわたしへ飛びつきさうにして、わたしを裸ひ上らせたのである。

先きにはわたしの心に佛があつた。二度目のわたしの心はただの人間にすぎなかつた。わたしは深く教へられた。地獄も極樂も、敵も味方も、自分自身の内にあると。

四

ある人がひとりて人を殺しに行く時のその人のうしろには惡鬼羅刹がぞろ／＼とつゞき「あの人を殺しては家族が困るだらう助けてやれ」と諦めて戻つた時のそのうしろには衣冠の從者がぞろ／＼従つてゐたのを街の易者が見たといふ支那の話は、わたしの犬の話に當てはまらぬでありますか。たゞ「可愛い犬だ」と、手をさしのべた時のわたしと、後ちに恐ろしい犬奴と、憎しみと警戒心をもつたわたしとは、全くの別人であつたに違ひはない。憎しみと警戒は敵意の中の一つである。犬たちは、きつとわたしのうしろにぞろ／＼と従つて戻つて來た惡鬼羅刹を見たのであらう。

(於わが草庵露宿洞)

北支戰線從軍僧だより (その一)

私の負傷記

淨土宗從軍僧

中野隆雄

山西二十萬の敵を討つべく天津駐屯軍曹島部隊に出動命令が下つた。一ヶ月あまり天津警備に腕を撫して居つた兵士達には天來の聲である。

私は曹島部隊本部附從軍僧であるから、部隊と共に山西出動に参加した。十月二十日山西省崞縣平鎮平地泉部落に着いた。

南方には、十二日より〇〇も激戦が續けられてゐる忻口鎮西北方の山々が連綿として連つてゐる。砲聲は殷々として天地を壓し、遙かに銃聲がそれに交つ

て聞えて来る。城壁に上れば南方の山々には砲彈の炸裂する様子が手に採るやうに見える。前線まで一里半の地點だ。

夕方城壁から降りして、長く／＼地上を這つてゐる夕陽の影をぼんやり見てゐると、蹄の音が聞えて來た。薄赤い夕陽を浴びて、前後を騎馬兵に守られた三人の負傷兵が擔架で送られて來た。私はやられたなと思つて、その方に馳けて行つた。私を見た負傷兵は「從軍僧の方ですね、私はもう駄目です。御名號をお持ちでしたら一つ頂き度いのですか……」

と苦しい呼吸の下に身を起しながら、私を見凝めた。私は内ポケットに入れて身に付けて

ゐた軍中守衛の御名號をあげた。兵はニッコリ笑つて、それを受取り「それで私も安心です。」

と兩手で靜かに胸の上に持つて行つた。擔架はやがて野戰病院のある次の部落に向つた。何時か夕陽も落ちて薄暗くなつてゐた。

それから二日目、後線部隊の到着を待つて曹島部隊は前線へ進軍した。二十三日午前五時頃、池上村に着く、四五丁先の山地は前線である。

小銃、機關銃の音、豆を煎るやうに聞える中を、耳をかすめてヒュー／＼と小銃彈が飛んで來る危険な所だ。然し戦地である以上仕方がない。部落内の道路には支那兵の死體が砂塵を浴びて、ゴロ／＼してゐる。

明れば二十四日、何回目かの總攻撃だ。未だ明けやらぬ中に山に立つた。私は最前線四百米の地點の救護所にをつて、負傷兵の手當を手傳つてゐた。

丁度十一時半、敵はわが第一線救護所へ卑



快にも集中射撃を始めた。小銃、機銃、迫撃砲の落下飛來だ。誰とはなしに「崖ぎはに上

れ！」と叫びながら崖ぎはに集つた。そこへ重傷者が運ばれて來た。危険だ！迫撃砲は二

三十米附近にビュッ／＼／＼と不氣味な音を立て、飛んで來てはツドンと炸裂する。小銃弾は頭上をひっきりなしに飛んで來る。誰れも出て行かない。すると野呂大尉が眞先に飛出されて負傷者の手當を始められた。

「誰か三角布を持つて來て呉れ！」私は傍にあつた三角布を四五枚持つて大尉の處へ這ふやうにしてそれをとけ、また這ふやうに元の崖ぎはへ。重傷者は擔架で後方へ送られた。

その時だ！砲撃が私の前方二間位に落下、私はハッとした瞬間、カンカンと鐵砲を大きな金鐘でドカ／＼とやられたやうに感じたと思つたら、その儘何も解らなくなつてしまつた。暫くして頭を擧げて邊

りを見ると、野呂大尉が「誰か來てくれ！」と怒鳴つてゐられる。

私は鐵砲を見ると二ヶ所凹んでゐる。瞬間起き上つた。左足が利かない。見ると血がにじんでゐる。利かない足を引摺り大尉の所へ行つたが、その時はもう他の軍醫殿が來て手當をしてををつた。

「君は？」とやられました。

すぐ手當をして貰ひ、後方假棚所へ退ることになつた。途中崖を出て、敵に面した谷間へ出たトタンにバン／＼と撃たれた。私はハッとして地に臥して向ふの山を見ると、七八名の交脚兵が私を覗ひ睨だ。もう駄目だと思つた一瞬、生れてから今までの色々なことが走馬燈の様にクル／＼と思ひ出された。すると氣が落付いたか、邊りの情況が良く解つて來た。すると後方で

「後へ戻れ！」

と叫ぶ聲がする。振返へると、今村從軍僧が手招きしてゐるのではないか。廢き返された様に、私は後ずさりして今村師と共に山を這

廻りして下りた。南華化の機所のある所へ行くには六十米ばかりの河を渡らなければならぬ。今村氏は私の荷物を持つて先に渡つて行く。私は痛む足を引摺り／＼河を渡り始めると、前の今村氏が突然馳出して向岸へ行き、

「彈が来るぞッ！早く来い！」

と叫んでゐる。私は馳られない。中程まで来ると、彈が落ちて跳ね上る。その時私は知らず／＼に

「南無阿彌陀佛を々々々々々……」

とお念佛を唱へてゐた。

岸まで来た時、前方から輸送部隊特務兵が四五人來た。

「危険だッ、早く／＼」

と叫んでゐる。私は思はず足の事も忘れて岸に飛上つたはずみに、何處かに左足を引掛け、バタツと前に倒れた。その時、今村氏と兵とが

「危ないッ！」

と叫んで私の手を引いた。何事だらうと思つ

て、足下を見ると、私は大形手榴彈を地雷火式に埋めてあり、針金で引掛るやうに出来てゐる、その地雷火に預いたのだつた。幸ひ不發だつたので、命は助かつたが、見事爆發してゐたら私は一片の肉になつて居たんだらう。

私は河の中で唱へたお念佛の力で不發だつたのだらうと今でも思つてゐる。

從軍僧
だより

東洋平和のためならば

淨土宗從軍僧

白崎 嚴成

馬頭觀音

私は涙なしにこの思ひ出を綴ることは出来ぬ。

私は石家莊の近く、とある部落で、こんな切實な人と馬の離れひを目の前に見たのである。夕陽地平に迫る日暮のひと時であつた。

馬は病馬であつた。毎日毎日の濕地行軍に

その時兵士達は

「こつちは彈がヒュー／＼来るのに、ノコノコ念佛なんか稱へて河を渡る君の姿が可笑しいやら、懊焦やら、何んとも言ひ様が無かつた。」

と云つて笑はれたが、私は眞剣だつた。今も私はお念佛と一緒に最前線に従軍してゐる。

征旅幾千里、流石の日本馬もその頑健さを失つたのであらう。

兵は星一つの特務兵さん、大方その馬の主人公であらう。馬は土塵萬丈の路上にばつたりと倒れてかすかに大きく呼吸をしてゐるではないか。

その馬の前にあぐらを組んで、どつかと坐り込んだ特務兵さんは、自分の膝に馬の首

あの長い首をしつかと抱きかゝへて大幣をあけて泣きぢやくつてゐる。

『おい、しつかりしてくれ、病馬牧容所はもうすぐだ。』

私は丁度その時、その側らを通りすこさうとしたのであつた。見れば馬の餘命いくばくもないのである。私はその馬にお十念を懇ろに授けてしづかに讀經した。特務さんは馬の首を膝にのせたまゝ合掌してゐる。泣いてゐる。泣いて合掌してゐるのだ。

『兵隊さん、どうぞ最後までしつかり看護してやつて下さい。しかしね、この馬は、やがて死んでも、きつと七度生れて馬頭観音となつて、反軍の多くの軍馬の守護をするに違ひありませんよ』

『從軍僧どの、有難う存じます。馬もさぞ成佛することです。この馬は年をとり過ぎてゐましたが、今日までよく奮闘してくれました。あゝ、それに、こゝ迄來て死なして仕舞ふとは口惜しいです』



そこへ三つ星の輜重兵が來た。曰く

『こらッ、何をしてゐる。泣いてゐるな』

『はい、馬が死ぬのであります』

さうして特務さんは、亦馬の名をよびつゝ

けて泣いた。馬は目にみえて刻々に弱つて行く。それをじつとみてゐた輜重兵上等兵は握りこぶしを目に當て、泣いてゐる。泣くおぢやないと叱つたその兵隊さんが泣いてゐる。

なんと云ふ人情溢るゝ場面であらう。私は思つた。どんな上手な俳優が、愛馬の那れ、鹽原太助をやつても、遠く／＼この只今の情景に及ぶべくもあるまいと。

さうして亦思つた。こゝだ！日本の兵隊さんが、世界に冠たる所以は、一頭の馬にそゝぐこの愛情こそやがては全世界の人の上にそゝがれる愛情ではなからうか。今はしばらくこの事を支那の上にのみ眺めて「東洋平和のためならば」の心境もまたこの一頭の馬上にかけられた愛情の發露と一つあつて二つない同じ心であると思つた。

すでに夕陽は沈んで風が寒く吹いて來た。

私は馬と特務兵さんに合掌して、自分の宿舎

に歸つて來たのであつた。馬の頓生菩提を祈りつゝ。

男の涙

進軍途上長休止のときである。

私が兵の傍に坐ると、『お坊さん、まだ自分には早いせ』と自ら敬して彼方のところに座を移つた。

私はその時に兵の多くに告げた。むづかく申せば『從軍僧とは何ぞや』と兵に語り告げたのである。

『從軍僧はオンボではない。いや、多くの從軍僧の中にはあへてオンボと同視して自らを安んじてゐる人もあらう。が、それは邪信で佛のとらざるところである。僕は常に無畏の信念に仕して沈痛果敢であることを信條としてゐる。そして君達には大慰安の中にその職に殉ずる覺悟の徹底につとめてゐる筈、また己れのたしなみとしては、常に軍律を重んじて言行を慎んでゐる。常に恭謙を旨として内に剛、しかも外に柔である。勿論、その職

僧である以上、戦死、病歿その他何れに對しては懇切懇慰することは當然であらう』と。

この言に對して兵の多くはうなづく、一人が曰く

『つまり從軍僧殿は友軍の活きたおまもりさんどすな。』

我が意を得たりと小生莞爾として微笑むと『それにしては、えらいぢ、むさいおまもりやな』と、

私は『これ何を云ふ』と輕くたしなめるものゝ、考へて見ると、さもありなん。たゞさへ貧弱なのが、こゝ四十日はかりに風呂はいふまでもなく、カミソリのかの字にすらお目にかゝらない私達、鬚は鬚のやうに繁茂して辛うじて煙草をふかしてゐる方が頭部の前面と解り得る現狀では、兵の戲談も一應はうなづいて然りといふところ。

或る日片桐部隊長は

『わし達は商賣ぢやからなんともないが、あ

んたは畑遣ひでありながら實によつうとまましたね』と。

丁度その日は猛進襲の第一戦で夜行軍、まさに四〇軒を出たのである。部隊長はさらに『いや、あんたの獸々の布教には兵も教へられるところが澤山あります。折角自重して下さい』と。

私はその時、ひそめてゐた行軍の疲れもけろりと忘れて、子供のやうに嬉しかつた。

その夜であつたらう。片桐部隊長はまさに火葬せんとする部下の一人、中島平三郎大尉のなきがらにすがり寄つて獨語せられた。

『中島君永らく御苦勞さまでした』(聞けば中島大尉は一兵卒から鍛え上げた特選の人)部隊長は靜かに大尉の手をとつて

『おや、冷たくなつてゐますね。どこをやられました。あゝ、大腸部貫通ですね。よく戦つてくれました。有難う！』部隊長はさらに白い覆ひを靜かにめくつて『ちつとも變つてゐませんね。……あなたの無念は……』

後は夜目にもそれと窺へる慈愛哀憫の涙一

…ムツソリーニは語る…

これはエミール・ルードヴィツヒと云ふ獨乙の學者がムツソリーニと試みた一問一答の抜萃である。

貧 貧

「貧窮はやはり貴方にも一つの教訓でしたか？」

「僕は良教師である。牢獄や敵と同程度に。私の母は小學教師で月給は五十リラ。父は鍛冶工で先づその同額位を儲けた。家は二間で、肉などは一週間も食べられなことは通例だった。父は随分烈しく議論もし喧嘩もした。父は社會主義者で牢死したのだが、父の葬式には何千といふ同志が墓場まで送つて行つた。これが實に私の憧憬となつた譯である。」

戰 争

「貴方ぐらゐる戦争で勇敢な人は先づ例外でせうね？」

「なほに、當時（大戰當時）のイタリヤ青年で、死に就いた者は數へ知れない。」

「將來の戦争は毒ガス戦でせうから、人間の勇氣や、個人的な働きと云ふもの、餘地がずつと減ることとせうが、それでも貴方は戦争が青年の訓練になると考へますか？」

「少しは變るだらうが、それでも砲火の下に立つと云ふことは善い一つの訓練になる。恐怖の戦慄を感じなくなることも、偉大な精神的効果を持つことは確かだからね。」

小 供

「貴方はイタリヤの子供を戦争に訓練してゐますね？」

「私は彼等を人生の戦闘に準備してゐるのだ。同時に國民との競争とも準備させてゐるのだ。」

滴、たまりかねて周りの將兵達も一度にとつと猛雨のやうに聲をあげて泣く。しかもなんと云ふ豪壯な男の涙、一瞬あとには涙も聲もなし、唯私の讀經の聲がしめつぽく太原にすだく秋十五夜の月、これを哀しく照らす。看よ、天の川も悲しとや、はなむけに流れて消える星も一つ。やがて屍に淨火は燃ぜられ私達はとほくと舍營にうなだれて歸る。

歸る途すがら囁くやうに一人の兵の口からもれる歌の一節、切々としてはらわたに沁む。靜かに／＼おき／＼なさい

『思へば今日の戦闘に、朱に染つてにつこりと、笑つて死んだ戦友が、天皇陛下下威儀と、のこした聲が忘らりよか。戦争する身はかねてから、捨てる覺悟であるものを、鳴いてくれるな草の蟲。』

あゝ、しかもこゝ北支のとある村里にして草の蟲は、鳴きに鳴く。

午前二時、兵の歌ごゑもかすかに細る

「東洋平和のためならば、なんの命が惜しからう。……」



水 鶏 笛

吉 田 絃 二 郎

今日は茨城縣の或る町の荒川といふ見知らぬ人からたよりを
いたゞいた。荒川氏は奥さんと二人でさゝやかなお菓子店を開
き、奥さんは傍ら子供たちに三味線を教へて活計の助けをし、
荒川氏自身は行商をつゞけて睦まじい家庭生活を楽しんでをら
れた。荒川氏は大正十四年頃から郷里の町を中心に散在する史
跡保存を獨力で志さし、奥さんに相談をしたところ、奥さんも
快く承諾し、夫婦一緒になつて働いては、その方の資金に使
つてしまつた。そして終に二十ヶ所の史跡に建碑の目的を達す
ることができたといふ、洵に奇特な心懸けの御夫婦である。し
かも氏は昨年の二月その糟糠の夫人を喪はれ悲歎に暮れてをら
れることがはつきりうかゞはれる。氏は自分を卑下して無學だ
といつてをられるが、氏の書かれた短い句にも歌にも懶々とし
て人の肺腑を抉るものがある。

逢ふ人に笑顔をしつゝ、語れどもつねにせつなき我が思ひ哉
食卓に向ひし時の淋しさに在りし日の如く食器ならべり
おそらく妻を失つた經驗を持つ人の誰もが感じる實感であら
う。

凍て土に妻の遺骨の冷ゆる哉
人目忍びて四季を通して墓參かな
亡き妻の涙あらたや水仙花

この三つの句にしても柏原の俳人一茶の素朴さと純情とを聯
想させる。誠心はあらゆる文藝上の技巧や匠意に勝ることの實
證である。

わたくしは三島の某氏からもたよりをいたゞいた。氏も妻を
失りて十三年孤獨を守つてゐるといふことであつた。
世間にはいろいろな苦痛をじつとこらへて生きてゐる人がか

なり多い。考へ方によつては人生は悲しみのために存在してゐるのだ。人生の本體は悲しみそのものである。苦痛そのものである。美しい花が咲く、可憐な小鳥の聲が聞える。しかしその歸るべき家は脚下の冷たい黒い土である。大地である。

花は天に向つて永生を祈念するであらう。しかし花はやがて冷たい土に還らなければならぬ。一度土に還つた花は再びよみがへつて美しい花となつて四月の太陽に向つて永生を祈念するであらう。しかも大地のみがかの女の休息の家である。宗教も哲學も藝術も地上に永生を期望する美花ではないか。人類は祈念し、咏嘆し、思惟すれどやがて悉く靜かな大地に還らなければならぬ。

しかしわたくしは大地に還るべく宿命づけられた人類の世界を悲しまないであらう。否、還り行くべき靜かな大地に恵まれてゐることを感謝するであらう。いかに人生が苦しくとも、悲しくとも、わたくしたちは靜かな安住の地を恵まれてゐる。そこには父もあり、母もあり、兄弟もあり、子もあり、妻もある。もし自分一人生き残つて百年の後二百年の後この地上にゐなければならなかつたとしたら、どんなに寂しいことであらう。

テニスの詩に子供たちが墓場の芝生の上で遊んでゐるのを

うたつたものがある。

大人たちは「そこは墓場だ。もうそこには誰もゐない」といふ。しかし子供たちはいふ「いや、この緑の芝生の下には兄さんたちが遊んでゐるんだよ」と。そして子供たちはたしかにそれを信じてゐる。そして芝生の下に兄たちと語つてゐる。

この大地のつゞくかぎり、否この天が存在するかぎり、かつて一度存在したるものは永遠に存在するであらう。父も母も妻も子も氷てついた土の下に必ず生きてゐるであらう。

冷たい土である。黒い塊である。しかしその死塊そのものの中から美しい花が咲く。

わたくしたちの肉眼には見えぬ。しかしその死塊こそわたくしたちの父、母、妻の魂を休息させてゐる實在そのものではないか。

人間は幾十、幾百回輪廻の世界に悲しみと苦しみとをくりかへさなければならぬであらう。しかしやがて天上の星がその星座から跳躍して暗の宇宙に一線を描くと同じやうに、大地に縛められたわたくしたちの魂もいつかは天に向つて大飛躍するの機縁を恵まれるであらう。そのをりこそわたくしたちは天上に於いて、悠久の世界に於いて愛する人々と再會するであらう。

けふは水鶏笛を買った。

芭蕉翁が旅に水鶏笛を買つて吹いたのを、人々が珍らしがつて芭蕉に水鶏笛を吹かせたことは芭蕉の消息にうかゞはしる。

芭蕉の水鶏笛は門人土芳や竹人等からさらに薩堂公に傳はつてゐたのが、大正の震災に烏有に歸したといふことである。わたくしが買ったのは、その水鶏笛を模して芭蕉の郷里伊賀の土で作つたものである。丸い慈姑のやうな形のもので、上に歌口が一つ切つてあるばかりである。そして肩のところに薄く青磁が懸けてあるのがひどく上品に見える。

今日は朝からの雪であり、午後は靜かな雨が降りつゞいてゐたので、訪ふ人とてもないわびしさに、佛間に坐つてはひとり水鶏笛を吹いて見た。吹き方があるのであらう。わたくしが吹いたのでは水鶏よりもむしろ山鳩の聲に聞える。しかしいづれにしてもなつかしい聲だ。

伊太利の牧童達が吹くオカリナ（Ocarina）といふ樂器も、ちよつと日本の土で作つた鳩などに似たものである。音は水鶏笛にも似てゐる。惣じて土で作つたものは鳩笛にしる、水鶏笛にしる、オカリナにしる何となく自然に近いわびしさをこめてゐる。オカリナといふ笛は友人に買つて大切に置いていたが、何

處へ紛れ込んだか二三年見つからない。

放送の戯曲を書き上げるために半月ばかり夜晝苦しんで、それから二晩遅くまで稽古に立ち合つて、家に歸るのは眞夜中の三時ころであつた。昨夜放送がすむと同時に急に骨でも挫けてしまつたやうに草臥れたせいか、今日は庭の雪を眺めながら終日寂しい心になつてゐた。わたくしの友人の俳優が芝居がはねてからがらんとした舞臺に一人立つと涙が出ると言つたことを思ひ出す。わたくしの放送劇の中で吹雪の夜、普門品を誦んでくれた若い女優さんが毎月「淨土」を讀んでをられるといふことを後で聴いたことなどを思ひ出したりした。

花やかに見える生活に身を投じてゐる人たちの中に却つて靜かな寂光を求めてゐる人がある。否、寂光を求むる人なればこそ花やかな脚光の前に立たないではをれないのかも知れない。

何も思ふまい。一切空だと觀じはして見るものゝ、なか／＼「水鳥の行くもかへるもあとたえて」といふ無所住の心にはなれない。世の中を捨て果てきとはおもひつゝも「花の咲く日はうれしかりけり」であり、「雪の降る日は寒くこそあれ。」迷ひ、惱み、苦しみ抜くのがわたくしたち悟り得ぬものゝ一生であらう。わたくしは悟り得ない自分を悲しいとは思ふが、輕蔑しうとは思はぬ。いつかは因縁の熟する日が来るであらう。



短篇
小説

出

陣

飯田 光明
河野 榮弘 畫

一

砦垣の上には二の丸の松が茂つてゐた。雲が切れる度に陽の光が強くさして、地上にくつきりとさまゝな影を落した。天守閣の薨がつい目の先に投影したし、太い松の幹や黒く茂つた葉先、梢が蜘蛛の巣のやうに映つた中に、白虎二番隊の少年達が密々にかたまつてゐた。

第一線の戦況がせつば詰つて来たことを知つて、言はず語らずのうちに集まつてしまつたのだつた。

誰も彼もが骨肉の感に堪へられず、何故、何故、僕達には出陣の御指令

を下さらんのぢや！

「この逸る胸、この熱血、この鳴る腕をど

う始末すればよいのか！」

「出陣懇願の建白書を上つてからでさへ

三日たつ。それに何の御沙汰もないのだ！」

と總導の篠田がいふと、

「寄合白虎を見よ。寄合白虎の三君を！」

已に七月の十五日、赤谷口の戦にあれらの

殊功をたてゝゐるでないか！ 僕達の土中白

虎は骨がないとでも思はれて居るのぢや！」

有賀が涙ぐんで慷慨した。

「残念ぢや！」

口々に「残念ぢや、残念ぢや」と云ひ合つ

てゐる中に、涙がにじんで来たり、聲が震へ

たりして、一人が咽び出すと、云ひ合せたや

うに皆が泣いてしまふのだつた。泣きながら、
氣でも狂ひさうな感情を互に抱き合つて慰め
た。

傷ついた瀝士達があへぎ／＼城門にたどり

ついては、ばつたりと倒れてこと切れてしま
つたり、騎馬の指令が、衣服を血で染めなが
ら本丸へ駆け込んでゆくさまを、白虎二番隊
の少年達は、日頃羨望の眼をもつて迎へてゐ
たのである。殊にこゝ二三日、砲聲は股々と
轟く。それが今朝からは一段と近づいて天地
に哮え、小銃の音がバチ／＼と重なつて聞え
るのだつた。

「日頃の訓練も無駄だ！」

「何故出陣出来ないのか！」

「胸がずた／＼に千切れてゆくやうだ！」

連日の砲聲で空には無數の千切れ雲が浮ん
でゐた。だから、陽は時々雲に遮ぎられて地
上の影繪を消しはしたが、雲が流れてゆくと、
眞夏の陽は忽ちひどく照りつけて、この勇ま
しい少年達や、松の梢や、天守閣の薨などを
もとのやうに描き出した。

八月二十日の晝で、むし返るやうに暑かつ
た。

二

翌二十一日の朝、日新館の横手に白虎二番
隊の面々が屯してゐると、微かながら、慌
しい蹄の音が聞えて來た。「注進だ！」と頭に
閃いた瞬間には、皆が保成峠の敗戦を描いた
顔は悲壯に硬ばつたし、燦々と燃える目は、
期せずして眞正面の坂道をみつめた。道は山
裾に添うて帶のやうに長く、かなりの勾配を
つくつて保成峠に通じてゐるのだつた。

蹄の音はかつ／＼と近づく。

一騎、二騎、三騎、視界に騎馬の若武者が

見えて來たとき、五番警導の有賀鐵之助は、

「兄上！」

と叫びながら、脱兎のやうに皆から離れて

石垣をとり降り、本丸への注進道に轉び出て、

「兄上、峠は？」

「峠は？」

連呼してゐる間にも、三騎は滾々と土煙を

たて、轟らに本丸へ駆けつゐた。

「兄上！」

「無念ぢや！」

「峠の味方は潰えましたか！」

馬上の兄は三間も四間も行きすぎてから、

「くどい！」

と浴せかけて本丸へ駆け込んで行つた。兄
の白い稽古着は血と汗で茶褐色に染まり、左
肩から斜に負うた太刀が、馬の鞍にがち／＼
とあたつてゐた。

鐵之助が、消え去つた兄の後ろ姿を呆然と
見てゐると、永瀬雄治、池上新太郎の二人が

走つて來て、

「有賀君、進撃だ！ 出陣だ！」

「指令を受けるのだと云ふよ！」

「瀧澤峠に進むのだ！」

と感激にうはすつた聲で叫んだ。

「一死、君公に報ゆるときが來たぞ！」

「おう！」無意識のうちに手首を握り合つ

てゐると、呼集の大太鼓が櫓で激しく鳴りは
じめた。

家老の菅野權兵衛から、出陣に際しての訓
誠と激勵を受けて歸るみち／＼、織之助は、
永瀬、池上の二人と勢揃ひの場所を自分の家
に定めて別れた。三人とも十六歳の同年で、
盟友の仲だった。

織之助が歸ると、駈とつた下僕の軍平が玄
關に出迎へてゐて、

「いよ／＼御出陣で……」

さう云つて涙をぬぐふので、織之助は、

「泣く奴があるか。祝つてくれ」

そのまゝ茶の間へ上つて來た。

姉の松乃がかひ／＼しく迎へて、載りたて
の袴や、袴古着や、朱ぬりの大小などを揃へ
た。

姉上、嬉しう存じます

「ご本望、おめでたうよ」

「正午、三の丸へ集合にござります」

「早うお召しね」

さういつて袴の紐を解いてくれた。

父の權左衛門は、京の蛤御門で戦死してゐ
たし、兄の織男は戦つてゐる。母の律子は、
まだ産褥にゐてたてぬ身を、墨で淨めて絹の
白無垢に着かへ、佛間へ用意の三寶などをと
り寄せて、織之助を待つてゐた。

母上

「おゝ立派。立派に身仕度が出來ました。

こちらへおは入り」

はい

佛壇には燈明が輝いて沈の煙が立つてゐ
た。

織之助

はい

「そちは忠臣の子、生を偷み家名を汚して
はなりません」

はい

「戦場にあつては進むに先頭、退くに後殿、
また妄進して軍規に違つてはなりません。射
撃するに當つては、目標をしかと定めてその
隙を狙ひ射ち、虚彈があつてはなりません」

はい

「白刃を交ふるには敵の劍尖に注目し、も
し劍尖震ふと見れば、遲疑せずに奮進するの
です」

はい

「織之助、そちは何故泣いてゐます。出陣
に涙は禁物、笑うてもなりません」

はい

「今度の戦は、彼は家、味方は寡、もとよ
り勝算はありません。たゞ一死、君國に報せ
ねばなりませんぞ」

はい

「今母の言つたこと、今度はそちがこの母
に聞かせて下さい」

織之助は復誦する。律子は一一頷いて満足
さうだった。

織之助が言ひ終るのを待つて、松乃が、

「お母上、弟に贈りたい品、御檢分下さ
りませ」

言ひながら白紙に巻いた短冊を示した。

水莖のあとも鮮やかな一首を、律子は二度
三度くちずさんでから、

三度くちずさんでから、

三度くちずさんでから、

三度くちずさんでから、

三度くちずさんでから、



「出かしました、松乃、讀みきかせておや

り
「はい」

梓弓向ふ矢先はしげくとも

引きな返しそ武士のみち

松乃が澄み切た聲に節づけてうたつた。氣

丈な律子の目にも涙がきら／＼と光つた。耐へてゐた哀別離苦の感情が騒ぎ立つて、かみしめた唇から激しい嗚咽になつて洩れた。織之助が押し戴いて短冊を受けると、松乃が肌着に縫ひつけてやつた。

「有賀君！」

「有賀君！」

永瀬と池上が來たのだつた。

四

陽が燦々と降つてゐた。

三の丸の廣場ではもう隊士達が集まつてゐて、袴の腰立をとつたり、額に垂れかゝる頭髮を洒木綿の鉢巻で止めたり、三々五々、思ひ思ひに集まつて辭世の句や歌を示し合ひ、

明々と「日新館綱領之賦」を吟じ合つたり、刀を抜いて風を斬つたり——、そんなことをして無量の感激をまぎらせて進發の時を待つてゐた。永瀬も、池上も、織之助も、感激に心と心がぶつかり、顔を合せると涙だけがにじんで來て、何も言はない代りに硬はつた頬をぬらした。

藩主松平容保は、すでに昨日の朝三百の精銳を率ゐて戸の口原へ出てゐたので、今日は世子の喜徳が自ら瀧澤峠に馬を進めるのだつた。白虎隊の少年達は、喜徳護衛の大任を受けた。躍り立つた。「喜こんで馬前に死ねる」欣喜雀躍、意氣はまさに天を衝かんばかりだつた。眞晝の直射を浴びて整列してゐると、十騎餘りがかつ／＼と近づいて來た。喜徳を先頭に、家老の原田對馬、同じく内藤介右衛門、海老名郡治、佐川官兵衛などがその後についてゐた。土中白虎の一番二番を主力に、長岡、飯野の兩藩兵約五十、それに水戸脱藩の兵と近侍、總計七十名餘りが、名狀し難い興奮の中に一行を迎へた。

栗毛の駿馬に跨つた喜徳は、三の丸の集合地へ來ると、馬を小高い砂盛に乗り上げて、

鶴ヶ城はまさに陥落しようとしてゐる。

吾々は晩節を守り終へたのだ。この上は運命を城と共にするのみ。諸君は忠勇義烈、諸君の身命を鶴ヶ城とこの喜徳に捧げて貰ひたい。

と大音を張り上げて言つた。感激に咽びなく聲はこゝかしこから發つたし、馬は頻りに嘶いて進發をあせつた。將兵悉く刀を抜きつれて天空に翳し、「おうー おうー」と二度三度奮ひの雄叫びを擧げてから、歩武堂々と城門を出た。

道の兩側には幾重もの人垣が続いてゐた。

老幼婦女に至るまで一語を發するものがなく、修羅場の光景を描いては武士達の悲壯な出陣に、たゞ感歎の眼を瞠つてゐるだけだつたが、身よりの人々はさすがに感極まつて咽いだりした。

死に互して歩きながら、織之助は先程から

妙な胸騒ぎを覚えてゐた。誰か自分と呼んでゐるやうに思へてならなかつた。

坊つちやまー！

軍平だ、下僕の軍平に違ひない——、違ひないと確信づいたとき、人垣を押し分けるやうにして駆け寄つたのは矢張り軍平だつた。

お、軍平！

お坊つちやまー あゝ、ご立派／＼！

息せき切つて足下に跪き、「ご立派、ご立派」と感歎してゐるうちに、織之助はもう二間も三間も先へ歩いてゆく。軍平は追ひ纏るやうにして、

お坊つちやまー！

軍平、未練ぢや！

いえ、軍平は、奥、奥様の御自害を傳

にまゐりました！

母上が御生害とな！

はい、些かのおとり亂しもなう……

織之助はわな／＼と震へる手で、歩き／＼

母律子の遺書を開いた。讀み終つてしまふと急に涙が溢れ出し、臉に滲つてはほと／＼と

落ちた。けれど不思議なことには微塵も悲しいなど、は思はず、却つて「母と共にある」そんな氣安さが湧いて出て、曇つた乳色の視界に龍澤口の修羅場が見えたりした。

母のこの行、決して淺慮には非ず、身隄かなれば城中に馳せて難役たりともつかへまつらんものを、未だ産褥にある身、却つて手足まとひになり候こと、返す／＼も無念に覺え候。先程もいろ／＼と忠言まゐらせ候砌、たゞ一つ言ひ残せしことあり、こゝに認めまゐらせ候。例へ敵兵たりとも死體を踏みまたぎて進むべからず、また、倒せし敵の體には必ず南無阿彌陀佛の十念にて回向しまゐらすこと云々

母の手跡を丹念に巻き收めながら、織之助はもう一度讀み直した。

倒せし敵の體にも必ず南無阿彌陀佛の十念にて回向しまゐらすこと

遠雷のやうに、絶え間なく咆哮がきこえてゐた。

筆・隨

知恩院詣で

梅はやゝ老い、櫻はつぼみ紅らむといふ頃であつた。お頼まれして華頂會館で催される講演會に赴いた。

その節は宗門擧つて営まれる宗祖方の重要な回忌の催しがあつて、講演會もそれを記念する種類のものではあつた。

しかし私は、たゞ心から知恩院にお詣り出来る機會が興へられたのを悦び、それが講演の責任感を軽くして、いそぐと西下の汽車に乗つた。

知恩院にお詣りするのは今度が始めてではない。京都へはたび行くつたので、あの「知恩院の傘」も、「驚張りの廊下」も人並に随分、前から知つてゐる。しかし知恩院は何度お詣りをして、詣り足りたといふ氣持がしないところに、あとで、いつも牽きつけられるものがある。何となく寛大で、そして靜寂な空氣が濃ふ中に、高雅な氣品と、なごやかな光りが籠つてゐる。それがどこといふことなく、見れば廣い境内に大きな御堂

岡本かの子

が山影を背負つてゆつたり据つてゐるだけである。實に不思議な魅力である。

こゝに開祖の法然上人の御風格を少しく物語らねばならぬ。上人の宗旨の、その形平易にして而も實に深奥な理の織り込まれてゐるのはあまねく人の知るところであるが、上人御自身の御風格が自然の玉のやうに角がなく、ある人はこれを春の海と言つた。中年までの努力の御研學と人間としての懺悔、いづれも平人に數倍或は數十倍するものを經られたのを、底の岩のやうに覆はれて、ひと影の角たもお見せにならない。また、開宗の後の諸方面からの迫害の激しさは暴雨烈風のやうなものであつたのも、ひと鐵の刻みも残されない。のびやかに、はろ／＼としてゐられる。自ら持されることは嚴にも密にもあられるのを人にはそれと知らしめられず、煩惱濁惡の衆川を廣く受け入れ、澄み淨めては豊に湛えられる。まつたく春の海のやうな御

風格である。もしまた、根本の志操を奪はれようとする場合には、汚名を蒙みず身命を賭するを辭せられない。その勇猛の膽を、中に住まして滅多に馳驅せしめられないことを平時、誰が窺ひ知らうぞ。

實に琢磨の極は天然の觀を呈し、常識の大なるものは平凡らしく受取られる。あまりに結構なものは却つて何處やら物足りなく見えるものだ。その昔、上人の宗旨に向つて、まだ奥儀があらう／＼と幾人もの淺見者が詰め寄つたことであらう。それは海に向つて細川の迂曲を求むるに等しい。

上人の風格を春の海と評し上げるのに、私に異存があらう筈がない。しかし、少しく藝術的感觸を働かして肌理こまかく觸れる場合には、そこになほ言ひ残されたものがある。それは一種の靜寂と、香り高い氣品である。私はこれを理想性の薰氣と言ひ度い。上人の趣味高く、文藝的造詣の深くゐられたのは毎々私たちが上人の和歌などによつて指摘申上げるところである。しかし、これのみによつて斯る深度のものは生れない。理想性を帶ぶるものは、いつも現實の活動に堪へ得られるところの氣力精神の待機のを示す、これが一種の靜寂な氣分を横へる。高い氣品は、愈々向上の志を疎かにしない程度に應じて帶同する。

それらの事が、上人を幾たび仰いでも仰ぎ足りず、いつも牽

き付けられる由縁であつて、この感は全く知恩院詣でるときに想ふものと同じである。塔は元來、人間の形を像るといふ。知恩院もまた、上人の面影でないと言へようか。私はこれでどうやら知恩院の魅力を解決出來たやうに思つた。

汽車は京都に着いた。お出迎へを受けて直ちに華頂會館の控への間に落付く。驛前より車で通る道すがら、今回の催しの參集團體の休憩所、その他關係の設備、町々、辻々、眼につかないところはない。山門を入ると、づらりと築地垣を並べた寺院は役々に當てられ、幔幕、立て標札、マークの標をかけた黒衣白衣の出入、用意おさ／＼怠りない。なほ境内に天幕張りの幾々棟は善男善女に占められ、中に圍まれて説僧の法話が親しげに聞える。

陽はうら／＼と晴れ渡つて、こちらの垣内の茂みより彼方の寺の薔に移る小鳥の影は、通路の餘色の石壁の上を擲めて行くとき、紫色の燦めきを見せてあたゝかい。もはや春である。華頂山は悠然と微笑んでゐる。

さしもの廣場も人と天幕に埋められ、それに寺々の美しき法飾、今日の知恩院境内は、よく經文にあるやうに一山花に壯嚴せられ、大地を掌として高く虚空に擡げられつゝあるやうである。どこからか聞える法鼓と法鈴——

しかし斯くも賑かな中に、やはり知恩院の知恩院たるところ

を失はない。どこことなく上品で、しつとり落付いてゐる。私は私を世話せられる婦人會の方々が、同じ揃ひの紋服の着付けをせられ、帯だけ各自のものを使はれてゐるのに氣が付く。その揃ひの紋服は決して贅澤といふ品ではない。しかし、物柔かく親しみと氣品のある姿であるのに感じた。佛教もかうこなれば實に嫌味が無い。あの方達も今では銃後の護りに勤められ、同じ協同の下に働いてゐられるであらう。

導かれて客殿へ通つた。私の控へるよう指定された座敷は、前に私たちが竹の欄干の外から觀望した襖は名畫で埋められてゐる座敷の中の一つである。私は諸方の寺院にお招きを受ける場合に、あまりに鄭重な扱ひ方を受けて痛み入ることがある。しかし、これも法の御爲め、文筆の御蔭と、心の中では轉じてその冥加を法と文筆とへ供養することにしてゐる。決して私個人の爲めには頂戴しない。

式は肅々として豫定通り舉行されて行く。私は先づ渡り廊下の根方にて、管長猊下以下姪々盡きない代表僧家の法服を嚴美に整へられ式場に入られるところを拜觀した。

次に本堂の席次の一部を與へられ、式の進行を隨喜拜觀した。満場の善男善女の心からなる満足と供養心とは私を動かし、た。しかし、この式のことには既に紹介されてゐるであらうし、また、その後、華頂會館へ戻つて私が奉仕した講演のことも今

更、くだ／＼しい。

私にはいくら大人になつても子供っぽいところがあつて、そこで頂戴したお辨當が嬉しくてしようがなかつた。私は女學校時代は跡見花蹊先生の家庭に預けられ、そこが家庭的な寄宿舎風になつてゐたものだから、お晝はそこで食べて御辨當といふものの經驗をしみ／＼味つたことがない。御辨當といへばどんなものでも珍らしい。それをかくも立派な、また禮儀正しいお辨當は私を殊の外喜ばした。御辨當は三重になつてゐて、上には見事な組み菓子が入つてゐた。京都風な清楚な料理方の精進料理も東京者の私には繪のやうに見える。王朝時代を思はせる梅花の形の屯食の御飯も奥床しかつた。

宿に案内を頂いて、こゝで御待遇を辭退し、一寛ぎしてから私は連れの家族と、すつかりお上りさんを發遣して京極をちよつと覗いたり、夜開いてゐるデパートへ入つてみたりした。京都の好みは派手でもけば／＼しくなく、地味な中にも含みのある、却々面白いところがある。歸つて来る頃雨が降り出して宿屋の門口へは傘を持つて迎へが出てゐた。京で春雨は悪くない。

あくる日、私たちは百貨店へ行つて、その屋上から市中市外全景を見渡した。よくデパートへ行くやうだが、私の職務の一つに新聞家庭面の女性の批判の欄を受持つてゐるものだから



どこへ行つてもぼんやりしてゐられない。何かしらその土地の女性を観察する機会を掴まねばならない。短い時間ではデパートへ行くのが一つの便理な方法である。

ゆうべの雨は晴れて、まだ四周の山々の隈や峯に雲がたゆたつてゐる。東の方は三十六峯、稻荷山の鳥居から八坂の塔まで趣きをかしく明滅してゐる。陽が當つて霧雲が薔薇色に包み込んでから知恩院が見える。ひどく懐かしい気がする。山内は賑はしく昨日にも増して人出の様子である。お寺はお詣りしてから遠く望むのが餘情が深いやうに思はれる。昨年の大晦日にラヂオで聞いたこの御堂の鐘の音を思ひ出す。

(伊達實伯筆 法然上人)



車を雇つて賀茂川べりをドライブする。これも遊びでは決してない。今度は文藝家としての職務的觀察である。とき／＼は堪らないと思ふときもあるが信仰に慰められ、自分の才能に世間から課せられるものは果したいと努めるのである。

蕪村の長詩の中の

柳枯れ石ところ／＼

といふ句を思ひ出す。實際、その通りのところもある。しかしその柳の中にも石の間にも、かすかに芽ぐむものがあつて、和めてゐる。寒に生えた堤の若菜に女學生の一组が健康な身體をまじ／＼に憩はしてゐる。上賀茂まで行つて東側へ渡る。これが昔の鞍馬道と運轉手が教へて呉れた。

この知恩院詣での時分から早や一年になん／＼としてゐる。そして、この一年間、いや、近き半々年の間に東洋の情勢なり世界の情勢なりは著しく變つた。そしてわが日本の活躍進展は驚くべきものがある。而もなほ今後のわが國民の責任は重大である。一山の方々並びに信徒の方々の中には健氣にも銃を執つて祖國の爲めに勇猛奮迅せられてゐる方々もあらう。國民精神總動員の策動に、銃後の護りに力を擧げて協力してゐられる方々もありませう。私も細筆の及ぶ限り努めてゐる。兎に角、この記事を書きつゝこの一年の歳月を顧みて感慨深いものがある。

小時
說代

靜しづか

御ご

前ぜん



今 野 賢 三
鈴 木 金 平 畫

一

吉野の金峯山にかくれてゐた義經は、そこにも鎌倉方の探
索の手がのびたので、ゐたゝまらなくなり、一緒にゐた靜を
無理にも京都へ歸らせることになつたのは、文治元年、十二
月の或る日のことであつた。

そこで、靜は從者の鎧色一人をしたがへて、人家の斷えた
山路を、ちからなくあるいてゐた。

義經の姿が、目のあたりに描き出されて、とうしても足が
すゝまず、立止つては溜息を吐いて別れた方をふりかへるそ
の靜の姿は、白拍子そのまゝの衣裳もあでやかで、荒涼とし
た景色のなかに咲く山茶花のやうにも美しく見えた。

笠の下から、悲しみをたゝへた瞳と、やはらかな頬かのぞ



き、義經の幻影に、呼びかけたいやうな唇がしづかに閉ぢられたままであつた。

靜はどんなにか、一緒に連れて行つてくれと義經にたのんだことであらうか。足手まとひになることはよくわかつてゐながらも、どこまでも、ついて行かずにゐられない氣持であつた。

十月十七日の眞夜中に、頼朝からつかはされた土佐房昌俊が、六十餘騎をひきゐて、義經の堀川の館を襲つたとき、不意のことであつたから、義經もいくらかあわて氣味で、

「なに、たつた五六十騎とか、このまゝ行つて蹴ちらしてくれよう」

と、跳ね起きたまゝのすがたで飛び出さうとしたとき、かたはらから、

「小敵でありませうとも、決して、侮つてはなりませぬ。お待ち下されませ……」

と、いそいで引止めて、背後から、おちついて甲冑を着せ、弓矢を面前へさゝげて、武將としての恥かしくない用意に心をくばつたのは靜であつた。

その夜襲が、兄、頼朝の家來、土佐房だとわかつたとき、さすがに、義經の顔はなやましげに曇つた。

「のう、靜！ 此の刺客の意味がわかるか？ 兄ちやびとが此の刺客をつかはしたのだ。此の義經に反旗をあげさせるためにの。こんな卑劣な策があるものか……」

「……………」

「ア、もう、しかし、義經は、その策にひつかゝるより道はない！ 武門に生れた意地として、たゞ殺されるのを待つことはできぬ。兄ちやひとに弓を引かねばならぬ。いや、こんな、つらいことが、世の中にまたとあらうか！」

「……………」

「のう、聽け、靜！ あの、去んぬる治承四年の四月、はじめて駿河

の黄瀬川で對面したとき、はからずもそなたとこゝで相見て、故き父上にお目どほりするやうな心地がすると、此の義經の手をとつて泣いた、その兄ぢやびとではないか……』

はげしい感情をこめてかう言つたとき、義經の兩眼を、あつい涙がはふり落た。

『しかし、兄ぢやびとを憎むのではないぞ。反旗をあげねば、廣い此の天地に、もはや、義經の生きる道がなくなつたのだ。察してくれよ。静！』

『御心中のおくるしみ、よく、わかります……』

静は、どんなにか、深く愛情をこめて、かう言つたことか。

それから後に、義經の決意は、昌俊を六條河原で斬つたのであきらかとなつた。

十一月三日、義經が京都を去るとき、平家のそののやうに、また、木曾義仲のそののやうに、決して、民衆の生活をおびやかさず、掠奪などしようとはしなかつた。やさしい性質は、さういふところにもあらはれてゐた。それだから、義經が去つたあと、京都の住民たちはみんな、立派な大將であつたとほめたてゝ、これからどうなることかと、不安な、暗い氣持にさせられたのであつた。

それだから、吉野の金峯山までいつしよに逃げて、そこから別れた静の眼には、勇敢な反面の、やさしい、義經の性格が映つてゐて、焼けつくやうな熱をそゝられ、京へ歸るといふことは、空虚な死の道

を踏みにひとしいのであつた。

二

『もうこれ以上、お供はいやになりました』

だしぬけに、うしろから鎌倉色が高い聲で言つて、背負つてゐた笈をドに置いて、おちつかなさうに、背後をふりかへつた。静はその意味をわかりかねて立止り、おなじ方向を見やつた。遙にながくつづいてゐる山路は、ほとんど人影も見あたらず、枯木に、松が黒ずんで交つてゐるだけであつた。だか、曇つた空が、ます／＼にぐりを濃くして雨か雪になりさうな、もの悲しい氣分があたりにすつかりみなぎつてゐた。

『いまさら、そのやうなことを言はれては、わたしがこまります』

『こまるのは、おまへさまよりも、この俺のはうだ』

言葉が投げつけるやうにぞんざいになつたので、静は不審と、をどろきの眉をあげて、鎌倉色の顔を見つめた。

彼女のキツとなつた視線から、あわてゝ眼を反らして、

『鎌倉方の、討手につかまるのは、おまへさまは覺悟のうへかも知れぬが、此の俺は』

『それで、おまへは恐しくなつたといふのかい？』

『うむ、まア、そんなものだ』

『豫州さまには、あれほど強く、此のわたしを都まで守つてゆくと誓

つたおまへではありませぬか、それに、いまさら』

『そのときはそのとき、いまはいまだ。討手に見つかつたら、此の俺とても、いのちがないと氣がついてみると、おまへさまのために、死ぬのが馬鹿らしくなつたのだ』

『見つかつたところで、おまへまで、殺したり、しばつたりするやうなことは』

『フン、そんなおまへさまの言葉で、安心してゐられるものか』

『では、ぜひがない』

『そこで、ねがひごとがあるのだ』

『なんぢや？』

『さ、此の俺が、お供をしたと知れては一大事、どこかへ身をかくして、後生安樂にくらさねばならぬ。そのため、金がいるのだ』

雑色な男の顔はなんのためか蒼ざめた。丈の高い、強力さうな雑色に似合はず、その態度が、ます／＼おちつきを失つた。そして、獲物を狙ふ鷹のやうな眼で静の全身を見まはしてから、うめくやうな聲を放つて、静が身を引くいとまもなく、胸のあたりを、力をこめてグンと突きとばした。

静はアツと叫ぶといつしよに、木の根につまづいて仰向けにひっくりかへつたが、起きあがるよりはやく雑色の大きな手で、石のやうにおさへつけられてしまつた。

そして、懐剣に手をやることもできず、身をもがいてゐる一瞬間、



雑色はおど／＼しながら懷中にしまひ込んである路用の金を一生懸命の努力でうばひとつて立上ると、靜の衣裳類を入れてある笈を背負ふて、首をぢりめ、背をまるめて、一散に走り出してしまつた。

……靜はやつと、身體の痛さをこらえながら立上ると、雑色にはとても追ひつけさうもないので、もはや、あきらめるよりしかたがなかつた。

（かういふ難儀はみな覺悟のうへのことゝいまさら、をどろいたり、なげいたりしてはをらぬ。豫州さまの、御無事を、一生懸命にねがふのが、これから、わたしの生きるたゞ一つのつとめ！ その御行末を都で聴くまではどんなことがあつても強い氣持をおこしはならぬ）

御 かう、自分にさゝやいて、當惑した、悲しい氣持をひきたてながらトボ／＼とあるきはじめた。

前 險惡な空は、黄昏初めたころから、雪が降り出し、あたりが暗くなるにしたがひ、強い風に乗つて白い花粉のやうに飛び、靜の全身を斜めに薙ぎたて、容赦なく追ひまくつた。

さうして、人家の灯をさがしもとめて、どのくらゐながいあひださまよひあるいたことであらうか。

手も足も、凍えつきさうな寒さと、疲労と、空腹とで、唇を震はせながら、うつ伏せに杖にすがつて、もはや、一步もうごくことができなくなつてゐたとき、耳をかすめて、風雪の飛ぶのに交つて、どこからか、二三の男の聲が聞えてきた。

靜はそれを、なにびとの聲かなど、かんがへる心の餘裕をもたなかつた。たゞもう救はれるよろこびでいっぱいになつた。震へる唇を噛むやうにして、その際する方へ自分からちかよつて行つた。

『もし、里へ行かれるのでしたら、どうぞ、連れて行つて下され。おねがひでござります……』

と、一生懸命に叫んでみた。

『お、妙な女の聲がするではないか』

『もしや、さうかも知れぬてのう』

『はやくつかまへて見ることだ……』

こんな言葉といつしよに、雪を蹴つて走り出した四五人の黒い影がまた／＼くまに靜のまはりを取りまくやうに迫つた。

三

鶴岡八幡宮の廻廊を、工藤左衛門尉社經が鼓を抱へ、いそぎあしで拜殿へ行かうとするとところを呼びとめたのは、梶原景茂であつた。

『工藤どの、此の俺もずるぶん女子を見たが、靜ほどの美しい女に會うたことはないぞ』

景茂は、腹の底から感嘆したやうな聲を放つて、大きな眼をギョララとひからせた。

『鎌倉あたりの、土くさい田舎女とはちがふでう』

『あでやかなものぢやー』



景茂はなんのためか溜息を吐いた。

『欲しくなつたか？』祐經は微笑をふくんだ。

『男とうまれたからにはのう……』

『馬鹿な』祐經は面白さうに肩をゆすつて笑つた。

『いや、馬鹿に見えるほど眞剣になるぞ』

景茂は、髯の濃い頬を赤らめて、むっつりとしてうつぶいた。

祐經がそのまゝいそぎ足ではなれて行くと、景茂は腕組みをして、

うなだれ乍らなにか考へ込んで、これまた急いでそのあとを追つた。

拜殿には、晴れた晝の光線が銀色の波のやうにあかるくながれ、奥

の一段たかいところに頼朝が、夫人の北條政子と、殿中で、靜の舞ふ

のを待つてゐた。群臣の居ながれてゐる前へ座を占めて、祐經が鼓を

畠山重忠は銅拍子を、靜の歌舞にあはせようと、一瞬、息を呑み、躍

をこらした。

靜は風雪のなかで捕へられて鎌倉に送られたが、どんなに責められ

ても、義經の行方は知らないと言ひ張つた。

『さすがは、薩摩師の女だけあつて、しつかりしたものぢや』

かう、感嘆の聲を洩らした武將は一人や二人ではなかつた。このと

き、靜は妊娠してゐたのであつた。そのため、頼朝はその子を處分し

ないうちには京都へ歸さうとしなかつた。

それに政子は、女性としてのおなじ立場から、靜に同情して、陰に

なつてそれとなくいたはり、頼朝の苛酷なとりあつかひをいさめて、

とゞこほりなく出産をすまさせようとしてゐた。なにしろ、白拍子と

しての靜の歌舞には、『天下の名人』としての、尊敬をもつてゐたので

政子はいちどその藝を見ることを頼朝にすゝめてきかなかつた。その

ため靜に歌舞を命ずることゝなつたものゝ、はじめはどうしても承諾

しないのであつた。義經との、別離の憂愁は、どんなときでも胸から

とれはしなかつた。まして、夫と慕ふ君の、敵にもあたる頼朝の面前

で、心ゆくまで舞ふなどゝいふことは、思ひもよらぬことであつた。

心が病み、苦しみ、悲しみをくはへたまゝで舞ふとすれば、ほんたう

に自分の藝を生かすことではない。藝道に生きるものには、そのみち

へ良心がひかつてゐなければならぬのだ。

けれども、靜は、強ひてもとめられるまゝ、どうしても承諾しなけ

ればならなくなつてしまつた。

靜の舞姿が、神前のやはらかな光線のなかに、浮彫にしたやうに立

つて、頼朝、政子はじめ、ひとりの耳と眼がいつせいにあつめられ

たとき、その澄んだ眼が乾と睨られ、なにものかをあこがれ、慕ふ、

ひかりを瞳にたゞへ、やさしくほぐれた唇から、ハッキリとした歌

の聲がひびき出した。

『……吉野山峯の白雪ふみ分けて入りにし人の跡ぞこひしき』

誰はとあるところなく、思ひきり、義經を慕ふ感情を吐いた此の聲

は、ちやうど、もの音の斷えた深山で、なにものゝさへぎるものもな

く、思ひのまゝに高く轉る、あの鶯の聲のやうに若々しく悲しく、

美しくひびいたのであつた。それから、金扇をかざし、白雪の袖をひるがへし、鼓の音にあはせて、別の曲とゞもに舞つてから、

「しづや、しづ、しづのをたまきくりかへし

昔を、今に、なす由もがな……」

睫に涙のつゆをやどして、また、一首、吟じをはつた。

群臣は、その歌のこゝろに眉をひそめるよりも、そのやさしい女性の感情に打たれ、その姿のうつくしさ、その歌舞の瞬間の恍惚に、なにもかも忘れて、聴きほれ、見とれてしまった。

たゞ一人、頼朝の顔には、ときならぬ怒りかあらはれた。

このとき、誰よりも、酔うたやうに恍惚となつてしまつたのは梶原景茂であつた。靜のすがたへ眼を凝きつけるやうに据ゑて、鼻の穴から大きく息を吐いてゐるところを誰か見かねて、うしろからソツと肩をたゝいた。

廳の中では、頼朝が政子をふりかへつて不氣味な聲を放つた。これはなにごとか。八幡宮の寶前で藝をあらはすならば、關東の萬歳、鎌倉の萬歳を祝うて舞ふのがあたりまへではないか。しかも、余が前をもはゞかはず、反逆の義經を慕ふ歌を二度まで口にすると、奇怪至極ではないか……」

そのとき、政子はなんのためか、意味ありげな微笑を口もとにふくんだまゝ、すぐにはなにもこたへず、頼朝の顔を、しばらくちつと見つめてゐた……。 (つゞく)

講 話 一 枚 起 請 文

法然上人の「一枚起請文」が淨土宗教義の精髓を盡したものであるのは今更多言を要しませぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基いて、易しく詳はしく説いたもので、これによつて毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正しい意味が、生活に即して、はつきりと解ります。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教用、教化用として多數の注文に接してをります。

定 價 拾 三 錢 (送料共)

多部數購入者への特典

團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引(九錢)とし、送料は當方にて負擔します。但し代金引換郵便はお断り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七



筆：隨

犬・猫・人・間・佛

佐藤 賢 順

昨年の春、妹がシェパード種の小犬の生れて一ヶ月程になるのを、他所から貰つてきて、血統が良いといふので、大事にして育てゝゐる。犬にとつては命に懸る大役だといふデイステンパーも未だ済んでゐなかつたし、小犬のうちには脚へ蛔蟲などがわき易いといふし、濕り氣が一番悪いといふから雨の日は風邪でも惹かれては大變だと殊更氣懸りになるし、何かにつけて家の者の氣使ひは一通りではなかつた。

四つになる私の頑童とは、直きに仲良しになつて、少し眼を離してゐると、いつの

間にか頑童は自身のお菓子を持つて行つては、犬に一口食べさせてはそれを又自分が食べて、又犬に食べさせてゐるといふ始末である。子供には喧しく言ふのであるが、頑童はお菓子を貰ふと眞先に犬の所へ持つていつてやる。時によると、どつちが子供だか解らない程に、庭の芝生で相撲を取つてゐるので、犬の病氣でも傳されるやうなことがあつては困ると、心配の種が一つ殖えてきた。元々犬や猫の餘り好きでない私は、早く返へしてしまふなり、何處か犬好きの家庭へやつてしまふなりした方がよい

と、再々主張したのである。

さう説き勧められると、ほんたうに手数が懸つて、厄介で困るからさうしませうと一應はその氣になるのだが、いざ他所へやるとなると、矢張り決心が付き兼ねると見えて、犬はそのまゝ大きくなつてきた。

そのうちにディステンバーに罹つて、やれ醫者だ薬だといふ騒ぎに、人間だけで澤山なところへ、犬にまでさう手を懸けなければならぬのでは、慙々たまらない。こんど直つたら、早速どこかへお興入れさせてしまふ、と衆議は一決してゐた。犬の醫者が毎日來ては、注射などをしてゆく度に、皆は可笑しいやうな操つたいやうな顔をして、「結構な御身分だね」など、笑ひ合つてゐた。

御用聞き八百屋の小僧を、文字通り「齒牙にかけてし」まつて、家の者が付添ひで醫者へ連れて行つた時などは、皆苦り切つてゐた。

或る日、犬はいつの間にか塀の外へ出て行つてしまつて、其の儘その日は歸つて來なかつた。翌日になつても歸つて來ないので、「家を忘れて歸つて來ないやうな犬なら、飼つて置いたつて仕方がないから、放つたらかして置かう」といふ者と、「殊によつたら盜まれたのかも知れないから早く届けておかう」といふ者と、議論は硬軟兩派に分れた。結局は矢張り警察へ届出て、何分の通知のあるのを待つことになつた。

三日経つても四日経つても、犬は歸つて來ない。皆は銘々違つた程度にはあるけれども、落着かない氣持を噛みしめて、「ヴェラの奴、今頃どうしてゐるだらう」(ヴェラとは伊太利語で美しいといふ意味)ださうだ。犬の親元で付けて呉れた名である。と、旅に出た身内の噂でもするやうに、世話を焼かせただけに居なくなつた今日此の頃、誰も彼も意識の片隅に残された虚ろなものに、そつと觸るのである。

あゝは言つたものゝ、歸つてくればどうした、どうした」と迎へてやつて、牛肉位は御馳走してやらうものと思つたりしたが、警察からは何の通知もないので、官廳公示事項の時間になると代る代る、ラデオのスプッチを入れては、警視廳の拾得物の公示を聴くといふ騒ぎであつた。生き物を飼ふのはこれだから厭やだと、私は心甚だ平かでなかつた。

さうして一週間程経つた或る日、ラデオに留り着いてゐた妹が、どうもそれらしいのが近くの警察に届出てあるといふので急いで馳せ着けてみた。すると、犬は風邪を惹いて熱が高いので——雨の中をほうつき歩いてゐたせいであらう——近くの犬猫の病院へ入れてある、駄犬ならとうに始末してしまふ所であつたが、良い犬だから今日まで待つてゐた、病院へ行つて御覽なさい、といふ事であつた。行つてみると、妹の聲を聞いただけで、氣違ひのやうに

吠え續けたさうである。正しくグーテであつた。結局五日間の入院料何がかしを拂つて、その上、三日分の藥を差上げますといふその藥價を拂つて、犬は再び吾々と相見ゆることになつたのである。勿體ない話である。

犬の事だからこんなにあつさり話が出来るものゝ、人生にはこれに似た話は數限りなくあることと思ふ。其の後、半年位になるが、近頃では、犬と遊んで時間をつぶす事の多いのは、私と頑童とである。

その時々、のヂエステアーで犬が要求してゐることが段々と解るやうになつてきた。庭の池の向ふへ棒切れかゴム毬を擲つて、それを取つて來させる練習などさせてゐると、命令を待つとか躊躇するとか決断するとか、可成り細な意識が働いてゐるのが解る。どつちの道を行つたら早く行けるか、と迷つてゐるらしい時には、こちらを向いて指示を求める。左手を振ると、驀地に左

へ走る。

誰であつたか昔の聖に小鳥の言葉を理解した人があるといふのも、ほんたうであり。森のトロウは小川の魚と話をしたさうである。生き物に等しく共通する地盤のあることは疑ひない。

それにつけて思ひ起すのは、「南泉斬猫」といふ古い話である。南泉山の普願禪師の僧堂では、多くの雲水達が東堂と西堂とに分れて、速に生死の大事を了得しようとして、互に修業を圖んでゐた。そこへ或る日、どういふ「自然」の氣紛れからであつたか、一匹の仔猫が迷ひ込んできた。外に無聊を紛らすものではない叢林のことであつたから、この仔猫を見付けると、雲水達は二人寄り三人寄つてきて、遂に大勢が仔猫を圍んで輪を描いてしまった。そして銘々が思ひ思ひのことを喋り出した。豫て與へられてゐた公案か何かで工夫を

發らしてゐたのであらうか、一人の僧は突然に誰に尋ねるともなく、獨り言のやうに言つた、

「こんな仔猫にも佛性があるのかね」

これが口火を切つて、

「猫に佛性なんかあるものか」

「猫が佛になる？ そんな馬鹿なことがあるものか」

といふ者と、

「いや猫にだつて佛性はあるさ、佛性は人間に限つた事ぢやない、無いとすれば、草木國土悉皆成佛といふことはどうなる？ 猫どころではない。一木一草、石や土にだつてあるさ」

といふ者が出て來た。

その靜ひは次第に激しくなつて、雲水達の聲は段々と高くなつた。果ては東堂と西堂とが二派に分れての大議論となつた。

けれどもそんな抽象的な議論よりは、仕舞ひには、この仔猫をどつちの僧堂へ持つ

て行つて、遊び相手にしようかといふところへ、その諍ひは落ちて行つた。

餘り喧しく諍ふ聲に、南泉和尚はふと外を見るとこの有様なので、出て来るや否やいきなり猫の襟首を掴んで高く掲げた。

そして衆僧を睥睨して

「さあ、言つてみる！」

と大喝した。衆僧にはこの「言つてみる」の意味が解らなかつた。すると和尚は續け標に

「言へる者があれば、猫の命は助けてやる。

無ければ眞二つだぞ」

皆は地平に踞んで、聲を嚙んだ。見ると、和尚の眼は火のやうに輝いて、右手には冷たい双が握られてゐたのである。佛性があるのなといふ閑文字ではない、猫などを遊びの相手にしてゐる時ではない、肝腎の悟の要諦はどうした、了得したのなら一言にして道破してみろ、と迫つてゐるのである。

雲水達は顔を見合せてゐるだけで、瓦のやうに黙りこくつてゐた。南泉は躊躇ふ様子もなく双を振ふと猫を眞二つに斬り捨てて、何事もなかつたやうな風に、さつさと引込んでしまつた。

夜になつて趙州が何處からか歸つてきた。趙州は南泉會下の數多くの弟子の中では、この人ありと聞えてゐる嗣法の高足である。托鉢にでも行つて來たのか、彼は泥まみれの草鞋を脱いで上つて來た。師匠の南泉は趙州の顔を見ると、待つてゐたと言はぬばかりに彼を把へて、晝間の出來事の一部始終を話して聞かせた。南泉の胸の中には、晝間殺した仔猫の事がふと思ひ浮べられたのであらう。和尚は重ねてかう訊いたのである、

「お前が居たら何と答へる？」

趙州は何とも答へなかつた。その代りにすくつと立上ると、上り端に脱ぎ棄てゝ置いた泥だらけの草鞋を頭に載せて、すたす

たと外へ出て行つてしまつた。泥だらけの草鞋を勿體ぶつて頭へ載せて、人を小馬鹿にしたやうな恰好で、屹度鼻唄ぐらひ唄ひ乍ら出て行つたのであらう。想像するだけでも面白い。

我々であつたらこれは何の謎やら解けないかも知れない。然し南泉は我が意を得たりとばかりに喜んで「それでよし、それでよし」と獨りで心に頷いた。後で趙州に、「その場にお前が居てくれたら、無益な殺生をしなくても済んだであらうにな」と語つて、流石に淋しさうな笑を漏したといふ。

この話は「無門關」にも「碧巖錄」にも「從容庵錄」にも出てゐて、禪門では餘りにも名高い話とされてゐる。然し趙州が草鞋を頭に載せて、何事も言はずに、すたすたと出て行つたら、南泉が「それでよし、それでよし」と手を打つたといふのは、實

は解つたやうな解らないやうな話であらう。これに就いては別段註釋がましいことを書かず、そのまゝ受取らなくてはいいないのだが、禪家で言つてゐる所を一二附け加へて置くと、趙州の舉動は「會し難し」と雖も却つて見易き一事で、「猫兒を斬ると草鞋を戴くとは更に兩様なきことであつて、若し趙州がその場に居たら、矢張り彼も猫を兩段したであらうと言つてゐる。

その趙州にはこんな話もある。或る時、一人の僧が突込んだ問を發した。

「一體、犬には佛性が有るのでせうか、無いのでせうか」

趙州は言下に「無」と答へた。そしてただそれだけだつた。然しこの「無」がまた大變に複雑な無である。それは「有るのでせうか、それとも無いのでせうか」の「有る」でなければ「無い」「無い」でなければ「有る」の、つまりあれかこれか (either-or)

either-or) の片方の「無い」と考へられてはいけない。

「有る」に對しての「無い」であつてみれば、それは全くの虛無に陥つてしまつて、人生にも世界にも、一筋の光もなく、寸毫の希望もなく、救ひへの藁ほどの手掛りもなくなる。恐ろしい絶望の深淵が大きく口を開くだけである。無をさう考へるなら、淡墨色の暮色が山寺を包むやうに、生の夕暮が人間を包んでゆく。

この無は「有る」とか「無い」とかを超えた無である。有るとか無いとかいふやうな事は、どうしても好いといふ立場に立つた無である。であるから、無と言つて悪ければ、有と言つたつて一向差支へない。つまり概念的な對立を超えた無であるから、有と無の對立的な考へが付き纏ふ間は、何處までもそれを超えてゆく發展的な、積極的な無である。それは空っぽな無ではなく、ふんわりとしたふくらみのある無である。

ヘーゲルの辯證法的揚棄とかエマーソンの否定の否定とか、そんなことを持ち出さなくとも趙州の一喝で事は足りるのである。「無門關」を講じた無門慧開和尚の生涯の課題がこの無の了得であつたことを思へば、この無の深さも想像ができよう。それは單なる無ではなくて積極的に何物かを肯定する無であるから、有と言つてもよいところを、有と言はずに無と言つたのは、その何物か、個別的に有ると考へ勝ちになることから超え出る爲であらう。個別的な存在や執着を克服する爲であらう。そこには大氣のやうに満ち満ちて佛性が生命に躍動してゐる。

この一篇では「犬・猫・人間・佛」の犬と猫だけしか書けなかつた。後半は次回に稿を改めることにする。

短歌

興謝野晶子選

一等 大阪 吉廣 夏生

いく日経て瓶に挿したる白梅の咲
き初めにけり香を放ちつつ

(評) 早春、まだ蕾の固い梅の枝を壺に挿して置いたところが、寒さに枯れもせず幾日かたつて、咲き初めた。根のないのに芳香をさへ放つて。作者はその喜びと驚きを詠んだ。

二等 東京 三野輪江雪

軒深く乾菜などある家の子よもん
べい着けて薬の靴はく

(評) 雪國のなつかしい情景。降りこめられて屋内は暗くわびしいことであらうが、子供は明るい外界へ靴と出て行く。

三等 大阪 小山 文二

小夜床に耳を澄ませば冬の雨五月
の朝のさやけさに降る

(評) 寒中に思ひもかけぬ暖氣が訪つて夜中に目がさめて見ると戸外には雨が降つてゐる、それも五月の朝のやうな新鮮さでと作者は春の近づくの

を喜んで居る。

千葉 高橋美矢子

二階より見ゆる海の面朝ごとにう
すがすみして春は來にけり

鹿児島 兒玉 フミ

又しても涙こぼれぬ父母なくて冬
の圍爐裡の廣く寒かり

京都 誠 也

さびしさを誰に語らん病ごもり久
しくなりし山里の冬語りてもよしなきものを淋しけれ
ば慰へんとする吾れのおろかさ

小倉 益田 牙谷

雪晴れの朝庭すがしほのかなる焚
火のほひ流れくるかな

大分 増谷しげ子

あさまだき社の庭の落葉はく白き
淨衣のはふり子のむれ

飯田 中山 弘

病みてとる鏡にうつる啄木鳥が庭
の柿にて物つつく冬

京都 郡司島誠也

つづら折り遠き山路をのぼり來て
神苑に立てば夜の白み行く

北海道 中村 もん

吹雪する夜はわびしけれ港なる船
の氣笛も叫ぶに似たり

仙臺 三浦 頼子

いくとせを病めば少女の新春のも
もわれ髪も結はで過ごしぬ

朝鮮 八年 坊

甌壠に走り書きすと綴りたる文見
るたびにわが胸をどる

静岡 一向山人

み佛も破邪の劔を説きましぬその
つるぎもて勳たてよ

大阪 白枝 寛

出で向ふ時なきわれやつつしみて
御旗のすみに名を書きとめつ

北海道 上杉 靜山

たづぬれどみのりの道の遠くして
拙きわれの性ぞ嘆かる

新宮 奥村 映水

千早ふる五十鈴の森に 鶯の清き

初音をききしうれしさ

石川 藤田四三九

みこもれる妻すこやかにあれかし
と朝に夕べに祈るこのごろ

北海道 花田 順佳

唱へつる佛のみ名を力にて我れは
行かまし西の淨土へ

大阪 小山徳三郎

朝な朝な庭はく上にきこゆなりお
ん經を誦す母のおん聲

東京 竹中 如月

祖師たちが残し給へるをしへ草今
日このごろぞ身にしみて生く

東京 喜代子

打ちあぐるわが皇軍のかちどきと
共に祝はん御代の初春

福岡 塚本 秋月

出征の吾子はげます父の目の奥に
ふと見る涙の光り

宮崎 井上 徳治

百八の鐘のひびきに夢さめて驚き
起きぬ己が心は

投稿規定、

官製はがき一回二首以内
とし「淨土」編輯部歌増係
あて送ること



江戸からの地藏尊

佛像の因縁話は、いろいろとあるやうです。殊に地藏尊についての話は、最も豊富ではないかと思ひます。

東京だけでも、地藏裁判で名高い細かけ地蔵、妖艶な美人の因縁話をもつてゐる指切地蔵、火傷のしてゐるところから火難、盗難、男女危難よけに信者をもつてゐる本郷東片町徳性寺の類焼地蔵、小石川戸崎町喜運寺の豆腐地蔵、鎌倉時代の名作として知られてゐる牛込袋町光照寺の子安地蔵弘法様の御作と稱する木像の状地蔵、それに芝愛宕下二丁目萬年山青松寺の奴地

地藏尊由來記

小 島 健 三

蔵といふのは、松平越後守の槍持、蘆田勘助を祀つたもので、これには、非常に面白い話があります。かうかぞへて来たゞけでも随分とあります。お珊地藏だの火消地藏だの那須與市宗高の守本尊で、聖徳太子の御作と傳へられる田植地藏、これは東京だけの地藏尊をあげて見たのですが、まだまだいろいろとあります。

現に最近の話ですが、秋田縣山利郡の岩谷驛と龜田驛との間にある折渡トンネルは、開通までに八年間ほど要しました。開通して見ると、ほんの四分間ほどで通過してしまふトンネルですが、非常な難工事である。この工事に當つた係長の息子は、高等學

校から大學を出てもまだトンネルが開通しなかつたといふ話が残つてゐます。このトンネルには何かの祟があるといふひだしたものです。私もこのトンネルを見學したこともありますが、實際この山に登つたこともありませんが、千人隠といふ岩があります。昔山賊が棲つてゐたと傳へられ、千人はどうかと思ひますが、とに角おほ勢の人間が隠れることの出来るやうな洞窟です。その近くに何時の頃祀つたものか、折渡地藏といふのがあります。

この地藏尊のたゞりに違ひないといふことになつて、工夫をはじめ、このトンネルに關係のある人がお詣りをしました。鐵道

大臣もこの小さな五六體の折渡地藏尊におまわりをしたといふことです。それから工事が案外らくに進行したといふ話です。この折渡地藏尊には、龜田藩二萬石の岩城侯が、こゝを通過の際、きつとお詣りしたといふ話です。

美女美男

現在、地藏尊で有名なのは、何んと云つても、集鴨高巖寺のとげぬき地藏ではないでせうか。四の目が縁目ですが、この爲めに省線の車臺を増設するといふ盛況です。このとげぬき地藏は、明治の中頃、下谷車坂から今の集鴨に寺と一緒に引移したもので、傳説の地藏としてばかりでなく、お利益では、南は九州から北は北海道までも鳴りひびいてゐます。この傳説が、また面白いと思ふのです。

正徳の頃、江戸番町に長谷川といふ旗本があつて、その家にお千代といふ番町小町とまでうたはれた美人がありました。ところ、このお千代の隣家に塚田といふ家

があつて、その倅新九郎といふのが、これまた評判の美男でした。お千代も綺麗ではありましたが、こう新九郎といふのは凄味のあるほどの美男で、二人ともに番町では、噂の人物でした。

しかし、どうしたものか、この新九郎はめつたに外出することはありません。ただ大變な美青年が塚田の邸にゐるといふ話だけで、實際に私が見たといふ人がありません。

そこへゆくと、お千代の方は、つきそひがついてよく外出しますので、近所のものは、わつとばかりに駈けあつまつて、この番町小町を見物しました。

このお千代の長谷川家といふのは、どうしたものか、女は短命です。姉さんらもお千代が物心がつくと、つぎ／＼に亡くなつて、女と云つてはお千代一人きりです。長谷川家には、昔から怨靈がついてゐるといふ噂でした。

ある夕方、お千代が庭を歩いてゐると、「お千代どの！」と呼ぶものがあります。

ふと、お千代が振かへつて見ると、眼も覺めるやうな美青年が、につこと笑つて立つてゐるではありませんか。

「あ、あなたは、どなたです」

「隣家の塚田新九郎でございます」

噂で聞いた美男の新九郎——お千代は、はじめて新九郎を見たのです。歌舞伎の舞臺から脱け出たやうな美男ではありませんか。

「あなたは、どうしてこの邸へ……」

「お千代どの、美しさに引かれて、うかうかと塀を越してまゐりました。お千代どの新九郎は、とうからあなた様を戀してゐました。この心を……この心を……」

夢遊病者のやうに新九郎は、お千代の手を握らうとしたのです。しかし、お千代には小石川に田村市之丞といふ許婚があります。いかに新九郎が美男であらうと、女の道にもとります。

「な、何をなされます。お歸り下さい」

お千代は、屹つとして新九郎をたしなめました。悄然として歸る新九郎の後姿は

お千代の眼に、心にいつまでも判然と残つてゐました。

その後、塚田家から、再三お千代を嫁に貰ひに來ました。しかし、つひに、新九郎の戀はいれられなかつたのです。それから間もなく、お千代は、田村家に嫁入してしまひました。だが、お千代の胸には、あの美しい新九郎の面影は、いつまでもく焼きつけられたやうに残つてゐました。

その翌年の春、塚田新九郎はお千代を戀ひこがれて死んだといふ噂を聞きました。お千代は、田村家に片付いて一人の男の子をうみました。間もなくどつと病床に臥してしまひました。

長谷川の家は、昔から怨靈の祟りがあつて女は早世するのだと思ふと、お千代は、たまらなく心細くなるのでした。いろいろな醫師や、薬も飲んでみましたが、一向にきよめがなく、お千代の體は、細る一方です。

と、お千代は、ふと——怨靈の祟りだとすると、神佛の威力を借りればよい——と



すると、ある夜のことに、墨染の法衣に、青色の袈裟を着た僧侶が、枕邊に立つて、

「お千代、そなたに、湧出の印像なるものを授ける。それを紙に押して水に浮べれば病は近いうちに治る」

と、のたまはれたと思ふと、スウーとお姿がなくなり、夢から覺めました。あつ—今のは夢だつたのか、夢は五臓の疲れといふから、よほど體が弱つてゐるに違ひないと思ひながら、ふと枕元を見ると、印像が、枕元にあるではありませんか。

「あつ、ゆ、夢ではない——」お千代は、力いっぱいその印像を抱きしました。

折針と御影

よく朝、それを紙に寫して見ると、地藏尊の姿が現はれました。これこそ日頃信仰の地藏尊のおもかげと、ゆうべの話どほり、それを紙に一萬體を寫し、家の者に助けられて兩國橋へ行つて、

思ひ、日頃信仰してゐた地藏尊を、一心不亂に念じました。

橋の上から南に向つてその紙を流しました。

「歸命頂禮地藏尊菩薩、一萬體の尊容たい今大川に浮べます。御利益を賜りますように」

お千代は、枯枝のやうに細つた掌を合せて一心に念じました。その夜は、晝のつかれが出たのでせう。一寝入して眼をさますと、かれこれ丑の刻、年の頃、二十四五の月代ながく、茶筌髷の美青年が、紺の小袖を着て、怨めしきうにお千代を眺めてゐます。

さう云へば、お千代の眉間から顔にかけて妙にぞく／＼するやうな寒さを感じて眼を覺したのですが、この青年がお千代の顔を吹いてゐたのでせう。よく見ると、何んだか見覚えのあるやうな顔ですが、それであつて、どうしたものか思ひ出せません。美青年は、怨めしきうにお千代を眺めてゐるだけで、別に口をきく様子もありません。と、どこからとなく青染の袈裟をつけた僧侶が、スウーと現はれたと思ふと、その

青年は、いよく顔を曇らせ、消えも入りたいやうに打萎れました。僧侶は、「えゝ、まだ、ぐづ／＼してをるか、早々退散しろ」

錫杖をもつて、青年の背中をビシ／＼と打ちつけました。それでも、その青年は、必死に身を潜めて、この場を去らずと努力してゐます。僧侶は、腹を立て、青年の襟首をつかみ、戸外へつまみ出さうとしたとき、もう一度、ちらとお千代の顔をきし覗いたその青年の顔、それは、まぎれもなく、

「おゝ、塚田新九郎——」

お千代は、思はず、さう叫びました。それと同時に、お千代の夢は覺めました。これは、日頃信仰の地藏尊の怨敵退散の靈夢で、それから、薄紙をはぐやうにお千代の病がよくなり、田村家は、末永く榮えました。

この話がひろまつて、田村家に地藏尊の御影を乞ふものが澤山にありました。

これから後の話ですが、毛利家の女中が、折れた針を口にくはへて朋輩と話をし、てゐるうち、誤つて飲んでしまひました。さア、醫者だ、藥だと騒ぎましたが、きゝめがありません。女中は苦しみつゞけるだけです。西順といふ坊さんがこの話を聞いて、この地藏尊の御影の御符を一枚水に入れて吞ませますと、あつ／＼といふ間に御影の紙が、折針をつゝんで、女中の口から飛びだしましたので、非常な評判になりとげ抜き地藏の御符として珍重されることになりました。

(大羽四郎畫)

その後、田村家では、地藏尊を家に置くのはもつたいたないといふので、高巖寺に納めたのです。



信・仰・座・談

眞人生の誕生

中野 尅子

□「新しい佛壇を買ふと、死人が
出ると云ひますが、如何です—」

○「新しい佛壇を買はぬでも死に
ます」

□「そりや、さうですなア」

○「佛壇を買つたから死ぬ、買は
ぬから死なぬといふものぢやあ
りません。死ぬことは、きまつ
てゐます」

□「—」

○「だから、死ぬことは心配せん
でもよろしい。誰でも死ぬるの
だから、死ぬことは六つかしい

事ぢやありません。それよりも、
死ぬ迄に、一日／＼を、どんな
生き方をしてゐるかといふこと
を、心配するなら心配せんなら
ぬのだが、此の方は一向考へよ
うともせぬのはどうした事でせ
う」

□「さうですネ——。而し死ぬ事
は怖ろしいから—」

○「いや、死ぬ事は怖ろしくない
のですよ。死ぬ迄に、やるべき
事がやつてあれば、死ぬ事な
んか平氣ですよ。恰度、試験な
んかコワくない、試験までに毎

日々々勉強してあれば、試験な
んか平日と同じ事、平氣で通つ
て行けます。それが、やるべき
事がやつて無いから、試験がコ
ワイのです」

□「試験と死とは違ひます。試験
は生きてゐる間の事だが、死は、
人間最後の時だから大切ですよ—」

○「アナタ方は閻魔様がコワイと
か、死後が恐ろしいとか言ふが、
閻魔様が悪い人でも、コワイ人
でもない。閻魔様に検らべられ
るような事をやつてゐるからコ
ワイのです。恰度、法律は悪い



備忘録

新しく雇つた給仕が、あまりに
忘れっぽいので、紙と鉛筆を渡し
て何んでも心覚えをこれに書き
付けて忘れないやうにしておけと
命じた。

次の日例の給仕が机の上に昨
日の紙をうや／＼しく擴げて見入
つてゐるので

「やあ、感心、感心。何を書いた
ね？」と近寄つて見ると

「心覚え——退社時間正六時」

穴埋読馬

支配人「會計主任は何處へ行つ

ものだ邪魔なものだと云ふのは、それは泥棒達、悪人の云ふ

ことで、法律が悪いものでも、

恐ろしいものでもない、法律に

引懸るやうな事をして居る自分

が悪いのです。私達悪い事をし

て居らぬ者には、刑法の第一條

に何が書いてあるか知らぬが儘

で暮らしてゐます。だから、悪

人には閻魔様が見えるが、善人

には閻魔様なシか見えないので

すよ」

□「それぢや、アナタには閻魔様

は見えませぬか」

○「エ、エ、私なシかには、閻

魔様なシかは一寸も見えませ

ん。ハハ——私には阿彌陀さま

が見えるだけです。ソレが信仰

ですよ」

□「——」

○「アナタにはどうです。閻魔様

が見えますか、阿彌陀様が見え

ますか。どちらです」

□「サア——」

○「どちらも見えませぬか」

□「ボツ／＼見えるのでせう」

○「どちらがですか、閻魔様がで

すか。ハハ……危険ですネ……」

□「いや、阿彌陀様が見えて来る

でせう」

○「いや、どうも怪しい。ハハ：

。而し、コレは笑ひ事ぢやあ

りませんよ。信仰問題の大きい

分岐點です」

一同沈黙、眞面目に返へる。

○「それで、話を元へ戻しますが。

結局、死が恐ろしいのでも、死

後がコワイのでもないのです

よ。やるだけの事がやつてあれ

ば、罪をあげられる譯もないし、

罪を罰する閻魔さんも無いので

たり、心配してゐるのは、今、

爲すべき事を爲さず、いらぬ取

越苦勞をしてゐる馬鹿者と云ふ

べきです。死後の恐怖におびえ、

色々と勘考するのが宗教でな

く、現在の一步／＼、一日／＼

の生活を反省し、充實すること

が宗教ですよ。すれば現實の生

活の解決と共に、未來の不安な

シかは、その中に籠つて、解消

□「——」

○「變な、幽霊の出て来るのは、

足元が暗いからです。足元が明

るかつたら、幽霊の出る處がナ

イ。自分の心が狐疑、逡巡して、

フラ／＼ビク／＼してゐるもん

だから地獄を造つたり、今の閻

魔様や鬼を造つたり、安請合に

請合つて救つて下さる佛様を想

像して、喜んでゐるのです。そ

たかね？」

給仕「競馬へいらつしやいました」

支配人「何ッ競馬ッ？ この月末

のいそがしいのに賭け遊びへ出か

けるとは何ごとだ！」



「でも、主任さん

は今日こそ帳尻を合はせる大事

な日だとおつしやつてゐました。」

流行型

妻「今年の春の帽子の流行はどん

な型になつてゐるかしら？」

夫「それはきまつてゐるよ、女の

流行はいつも二つの型に分かれて

ゐるのさ。その第一は君の嫌ひな

んな佛や神だつたら、皆、化物です。幽霊、幽霊、幽霊の救済や、幽霊の宗教が多い」

○「何が何だか薩張りわからぬやうになつて来ました」

○「いや、よくわかつてゐますよ。

わからぬのはアナタだけです。

信仰が無いからわからぬのです。コレがわからぬ程、あなた自身の信仰がわかつて居らなだけです」

○「さう云はれたら、何とも云ふ事が出来ぬが、何とか、もつとわかるやうにして下さい」

○「いや、悪るう御座いました。

今にわかつて行きます。それで——。私は、唯だ強がりをお口先きばかりで云つてゐるのでなく。本當に死ぬ事な一寸もコワがつて居りませぬ。そんな事心配したつて、一瞬先きで

死ぬかも知れません。いや、遠

から先きで必ず死ぬにきまつ

てゐるから、そんな事心配せぬ

でもよろしい。安心です。誰で

も死ぬにきまつてゐる事だから

安心してゐていゝ。それよりも

寧ろ、それだからこそソノ死ぬ

瞬間までに「立派な生き方を」

して措かんならぬ。此の方が大

切です。だから宗教は、死の間

題でなく、生の問題。死を問題

にするのではなく、生を問題にす

るのが、正しい態度です」

○「それぢや、死を放つて置いて、

生を問題にするのですか」

○「さうです。死をコワがらなく

なつた位は信仰の一年生です。

死を怖れなくなる事が、信仰問

題の入學試験です。コレにパス

して、漸く信仰問題に初めて第

一步を踏み込んだのです。昔か

ら、死を了悟したなソというて

威張つてゐるのがあつたが、そん

な事は、何も自慢する程の事で

はありません。それをまだ世間

では、死の難門にブツかつて、

古來御經には死の問題を斯う説

いてゐるの、ア、説いてあるの

と、ゴタ／＼、ゴタ／＼スツタ

揉んだと騒いでゐるのは笑止の

至りで、そんな御經に説いてあ

る文句で解決するのでなく、

死とは——死ぬことだ！

とハッキリ知ればいゝ、それだ

けの事で六つかしい事でもなん

でもない。さうなれば何のゴゴ

トもなく死んで逝くだけの事で

す。さうしてその死ぬ迄の間に、

精一杯、如來さまの御慈悲によ

つて「如來の道」をやらさして

賤いて行かうといふ、決心と望

みが残るだけです。だから人生

型、その第二は僕が買ふことを好まない型の二つさ。」



手品の種

「ホラ、失くなつたよ」

とお父さんが、子供の帽子をとつ

て、汽車の窓から乗る眞似をして、

隠してしまつた。子供は本氣にし

て泣顔になつた。トタンにお父さ

んがまた帽子を出して

「おや／＼、出て来た、出て来た」

と云つて見せた。子供は不思議な

顔をして

「今度は僕がやるよ」

と云ひながら、いきなりお父さん

なして簡単なものです。信仰間題なして簡単なものですよ」

□「いや、それがさう簡単ぢやありませんよ」

○「いや、そんな事を云つてゐるからダメです。法然上人は「申す外に別の仔細候はらず」と一言で片付けてゐられるぢやありませんか。又「たゞ一向に念佛すべし」と簡単明瞭に斷言し、

「此の外に奥深き事を存せば二尊のあはれみにはづれ、本願にまれ候べし」と警告してゐられる。そんなに宗教といふもの簡単なものです。尼入道の愚痴の輩で十分わかるものだ、と、兩手印で太鼓判を捺してキツパリ云つてゐられる」

□「それはさうでせうが、さう簡単には私にはわかりません」

○「それは、法然上人のやうな心

持になつて、眞劍にアナタが信仰を求めた事が無いからです。

だから法然上人の御法語もわからないのです。眞劍になつて求めて／＼御覽なさい。すると、

如來さまが

今、お前を生かして居るぞー

と仰被るお聲がシツカリ聴こえて来る。そして此のやつてゐる仕事、如來さまからやらされてやつてゐる大悲行であつたか、菩薩行であつたか、人間行であつたか、佛行であつたかと

氣が付き、それぢや本當に、如來さまの思召し通りに、此の職業、此の商賣此の勤めをやらなきやならなかつたのだと、初めて「生活の意義」「價値の生活」「生命の尊嚴」を感じます。そして改めて自覺せる生活、正しき、明るき、力強い生活の第一

歩に踏み出します。それがアナタの眞生です。新しき人生の誕生です。どうか、アナタの内心に向つて呼びかけて下さい。祈つて下さい。念佛を申して下さい。い。するとアナタの衷心——内奥より、醒め、叫び出して来る聲があります。それが佛の聲です。

吾れ、汝を救ふ——

吾れと汝と一なり——

といふ、本願召喚のみ聲です。

アナタにヤレー——と命ずる無上命令です。此の聲を聴き、此の示しによつて、一道を貫くことに於ては、何人の前と雖も憚らぬ斷乎たる正義の途です。古今に通じて不謬、中外に施して不悖る不滅の道です。コレを信仰といふのでせう。コレを眞實生命の開顯と謂ふのでせう。

の帽子を取ると、ボンと窓の外へ投げてしまつた。

「さア、お父さん、また出して御覽よ」

醉眼朦朧



「君、君。選手はシーズン中酒を飲んでではならんと云ふことになつてゐるのが解らんのか。晝間から酔つてゐるとはけしからん！」

選手「監督さん、僕は酒なんぞ飲んでをらんですゾ。よ、よつぱらつてゐると云ふ證據でもあるんですか、監督さん。」

「あるさ、僕は監督ぢやないのだよ。」

婦 人 と 家 庭 の 淨 土

新時代の女性美

論 評 性 女

松 前 公 子

女性（じやうせい）の美（うつくし）しさは時代（じだい）と處（ところ）によつて其（その）標準（ひょうくわん）が違（ちが）ひます。古代（こくたい）の日本（にっぽん）女性（じやうせい）の美（うつくし）は顔（かほ）の瓜（うり）眞（ま）型（がた）である事（こと）が第一（だいいち）の條件（じょうけん）でありました。近代（きんたい）女性（じやうせい）の美（うつくし）は概（おほ）して丸（まる）顔（がほ）で均（ひと）整（と）のとれた體格（たいかく）の持（も）ち主（しゅ）にあると稱（よ）されてゐます。又（また）日本（にっぽん）の美人（びじん）型（がた）と外國（がいこく）のそれとには斷（き）然（ぜん）たる相違（さいちが）がある様（よう）です。

女性（じやうせい）の美（うつくし）しさは時代（じだい）と處（ところ）によつて其（その）標準（ひょうくわん）が違（ちが）ひます。人々（ひと）個々（こご）の性格（せいかく）教養（きやうよう）によつて好（この）む美（うつくし）の標準（ひょうくわん）が異（こと）なふのも言（い）ふまでもありません。人間（にんげん）は母胎（ぼたい）に宿（よ）つた時（とき）、已（すで）に容貌（がうぼう）の美醜（びしう）が定（さだ）められてしまひます。美人（びじん）醜女（しうにょ）の差異（さ）が運命（めいめい）的（てき）に定（さだ）められて、生涯（しやうがい）それが決（き）定的（てき）に變（か）らざるものとしたら神佛（しんぶつ）はあまりにも不（ふ）公平（くわいへい）でありはしないでせうか。容貌（がうぼう）の美醜（びしう）と同様（どうよう）に人間（にんげん）の賢（けん）愚（ぐ）の差（さ）も又（また）或（ある）程度（ていど）生得（しやうとく）的に定（さだ）められてしまふでせう。

教養（きやうよう）低（ひ）きものは概（おほ）して容貌（がうぼう）によつて美醜（びしう）を定（さだ）め、教養（きやうよう）高（たか）きものはそこに理智（りち）的（てき）聰明（めいめい）なる美（うつくし）しさをも求めます。所謂（すいゐ）性格（せいかく）美（うつくし）、個性（こせい）美（うつくし）はその聰明（めいめい）さから來（き）る教養（きやうよう）によつて發揮（はつはい）されるものでせう。新時代（しんじだい）の女性（じやうせい）に求（もと）めるものは單（ただ）なる容貌（がうぼう）の美（うつくし）に満足（まんぞく）しきつた無教養（むきやうよう）な白痴（はくち）美（うつくし）でなく、理智（りち）的（てき）のひらめき、己（おの）れを知（し）つた個性（こせい）美（うつくし）の探求（たんくわう）でなければなりません。更に又（また）、より尊（そん）き信仰（しやうぎやう）の力（ちから）によつて現（あら）れる神々（しんしや）しき女神（めいじん）の輝（かがや）きをこそ新時代（しんじだい）の女性（じやうせい）美（うつくし）の中（な）に見出（み）出（で）したいと念（ねん）ひます。それこそ、生（な）れ乍（さ）らに持（も）つた醜（みにく）さも、才（さい）の低（ひ）さを救（きう）つて美（うつくし）しき信（しん）念（ねん）と信仰（しやうぎやう）の強（つよ）き光（ひかり）を輝（かがや）かせてくれる事（こと）でせう。

讀者の皆様へ

一、女性（じやうせい）評論（ひやうろん）（二百（にひゃく）字（じ）づメ五（ご）枚（まい）以（も）つ）
二、信仰（しやうぎやう）家庭（かてい）實話（じつわ）（同上）
右（みぎ）の通り（どおり）寄（よ）集（じふ）します掲載（こうがく）の分（ぶん）は薄謝（はくしゃ）を呈（てい）します。

夫の好む料理

主婦（しゆし）心（こころ）讀（よ）

縫（ぬ）きしの着（き）物（ぶつ）をほつて、「ア、もう夕飯（ゆふばん）か！、今晚（こんばん）は何（なに）にしよう！」と考（かんが）へたあげく、「女（おんな）になんか生（う）まれるものぢやないねー」などどこぼす女性（じやうせい）をさらに見（み）うける。料理（りやうり）と縫物（ぬいぶつ）が主婦（しゆし）の第一（だいいち）資格（しきかく）である事（こと）は言（い）ふまでもない。だから料理（りやうり）上（じやう）手（て）はあたり前（まへ）の事（こと）であるが（男（おとこ）の横暴（ごうぼう）かな！）いくら料理（りやうり）がうまくても、夫（おとこ）の趣味（しゆみ）、好（この）むをかははず、はいからで立派（りつぱ）な料理（りやうり）をされてもちつとも有難（ありがた）くない。それはまだいゝとして、「今晚（こんばん）何（なに）にしませうか」などときも重大（じゆうだい）さうに料理（りやうり）献立（けんてい）など相談（さうだん）されるとも早食（はやく）ふ氣（き）も起（お）らない。「今日（けふ）はカツを」「今日（けふ）はフライ」

國民精神總動員の基!

家庭
信仰

勤行のすゝめ

不・平・不・満・を・除・く・家・庭・相・談・會・に・も・な・る・!

お寺はお經を讀む所、おつとめをする所と、誰もが思つてゐますし、お寺へ行くと手を合せておまゐりしますけれど、「我が家」に於ては祖先の命日にならねば佛壇に向はぬ人が多い様です。

です。

そんな意味で、祖先の佛壇に向つてする勤行こそ國民精神總動員の基であります。

勤行を朝晩正しく時間的にする事は一家の秩序を定める事になります。朝起きてお掃除の後朝飯をいたゞく前に一家揃つて佛壇に向ひ、又一日の仕事を終つて安らかなむりつく前に其の日の安全を祝福してみ佛に感謝する。

この敬虔な氣持こそ一家の團圓を守る鍵になるのです。

勤行に必要なお經の本は夫々の檀那寺の和尚さんに頂き指導してもらへばよいと思ひます。

先づ今日は父の維那(お經の始

めの句を誦すこと)をして、それにつれて家族が合唱する。さわやかな氣分が家中にあふれます。そして終つた後、維那(父)が今日の一日の心得、夫々の御注意を與へ、晩は其の日の結果を公評する。次の日は、母の維那、母の慈しみ深い御注意、次は姉、兄、次は末の太郎君、太郎君の不平等もよいでせう。

かうして一家お互ひに注意し、抗議し、相談し合つて楽しく、然も厳しく暮せる様になればメタもので、どんなに辛い嵐がこの一家の上に吹き荒んでもガツチリ組んだ心は常に固い磐石の上でゆるがないでせう。

心あれば、と言ひますけれど儀式あつて始めて固まる心です。先づはづかしさを捨て、高唱、勤行をつとめて致しませう。

などと注文したとたんに飽きてしまふ。

そこにこそ主婦の賢明さがある。「今晚は何かなり」と想像する事は男子最上のよろこびなのだ(少し下品でせうか?)さつぱらんに言つて食事は人間の生命だから。

そこで、夫の好む料理とはいししい妻が賢明にも自分の好みを知つて選擇してくれた料理である」と或る食道樂の先生が言つたものである。

錆びない針刺

針刺の作り方もいろ／＼ありますが、羅紗やメルトンなどのやうな毛織物を、四角に或は丸に夫々好みの形に切り、幾枚も重ねて心に入れると、決して針の錆びることはありません。また毛糸も同様の効果があります。但しどちらにも純毛に限ります。



家庭醫學

流感にかゝらぬよう

醫學博士

大橋りゆう子

感冒

にかゝるのは冬から春にかけて多いので

すが、たとえ寒いだけでなく空気が乾燥する爲でございます。

雪や雨の多い所では割合に少く、乾燥した寒さが続く場合は特に風邪に注意しなければなりません。

風邪は萬病のもとと申しまして弱つてゐる身體にお風邪を召しますととんだ病氣がおこつてとりかへしのつかぬ事になりますから充分御注意して下さい。大人も子供も扁桃腺を起しますし肺炎なども急性になりますと二三日乃至一週間を取り返しのつかぬ事になつてしまひます。

咽喉

を傷めた時や、又豫防として第一にうがひ、第二吸入、第三咽喉の湿布、

第四湿布マスク等色々の方法をしなければなりません。

寒さの折などマスクをかける人が多い様ですけれど、うち側に湿つたがいぜを入れてゐる人は殆どない様ですがそれではマスクの用をなしません、面倒でもがいぜを湿してマスクに入れ、寝る時とすると大へん効果があります。うがひ薬は二プロか三プロ（御飯碗一杯の水に一サジ位の量）のホーサンを溶かして用ふればよいのですが、簡単に食鹽水や番茶でもよろしいから外出から歸つたら

必ずうがひをする事です。

湿布はエキホスなどがよいと思ひます。

之は私の自己流ですが風邪をひいた時ワゼリンを鼻の粘膜にぬつてやすむと大方なほります。それは粘膜が保温されるからです。

風邪

は微菌が鼻、咽喉の粘膜、扁桃腺を徹し

て血液に入るのでですからそのバイキンを殺さねばなりません。アスピリンなど悪くはありませんが量を過すと胃を傷めますから注意を要します。

又咳の出る時は胸をエキホスなどで湿布することです。風邪から肺炎、氣管支炎、肋膜炎

佛縁

小橋麟瑞

それは何と不思議な因縁なのか、私は亡き吉田絃二郎氏夫人の戒名と御逝去の年月を本部にお訊ねした結果が、昭和十二年七月一日とあるに驚いたのである。年號こそ違へ、大正の同じ年、同じ月、同じ日が、私には夢寐にも忘れ難い亡き母の日ではないか。熱涙を以て慕はれる吉田先生と亡き奥さんとの間に通ずる氣高い人格的な靈交は亦私にとつても同じ道でなければならぬ。私の此世にあるかぎり、想ひ出の母と共にあるべき一人を吉田先生の亡き夫人の名に於て加へられたことは不思議でならない。遂に現し世にては一度もお目にかゝらなかつた然かも筑紫の

をおこし易く慢性になると肺が弱り結核や腹膜炎、關節炎、蓄膿症、中耳炎、子供脳膜炎等あらゆる病氣にかゝり易い。

扁桃腺は子供は大きく大人になると小さくなるもので、十二、三になつても小さくならず、しよつちう扁桃腺炎をおこす様では耳鼻科でとらねばなりません。それも炎症を起してゐる時は手術してはいけないので、丈夫の時にとらねばなりません。

子供

は多く容態では仲々風邪(病氣)を見分けにくいのですが、そんな時便を検査する事が一番大切です。ですから顔色や咳や、くしゃみよりは通じに注意する事です。

もう一つ子供は多になると乳児脚氣が流行り易いものです。脚氣は夏起し冬になほるものですが、多に出るのは本當に悪性のもので、すから充分の注意を要します。

乳児脚氣にかゝつた子供の便は緑青色の便が出ますからその時は早く母方の(母の)症状は見えませんが、ビタミンを補充しなければなりません。

ビタミンBは胚芽米、半搗米を常食にするといふのです。餘談ですけれども日本全體で一年中半搗米を食べると大學が三つ建つと言ふ事でございますから經濟上からこの非常時には是非半搗米や胚芽米を食してもらひたいものです。

日光

たゞ半つき米は繊維が多いから胃腸の弱い人にはすゝめられませんが、胃腸の普通の人には本當によいと思ひます。それから、を食ふ事、衛生上一番必要の事でございます。人間の體内に於けるカルシウム、ビタミン、肝油なども、紫外線に會はねば何の役にもなりません。ですから日光にあたられね

ば、食物の營養分は効果が少い譯です。

日光はガラス越しではいけません、障子越しの方がいいのですが、直接に當る事が大切です。

妊娠

した奥さん達は冬なが、庭の散歩位はして、日光浴をした方がよいのです。塵は紫外線をよく吸収しますので都會の日光は役に立ちませんから郊外か田舎に出たりするか、近ごろでは人口紫外線も家庭で簡単に用ひられますからそんな方法を取るとよいと思ひます。

(下段より)

た奇しき因縁に限りなき感懷を味はずにはゐられなかつた。私は自家の過去帳一日の欄に母の戒名と並べて
前光院芳譽明枝大姉 昭和十二年七月 陽子
と謹記して合掌した。

はてに在る私が吹上濱の句碑を繞つて法然上人遺仰會を通して結ばれてゆく不可思議の道、今は亡き人にてあればこそ「淨土の再會何ぞ疑はむ(勸傳三十三)」その歡びの日を信じ得ることの歡びが此世に顯はれたのである。私は勸傳十九の聖如房へつかはされた法然上人の狀「詮じては此世の見參、とてもかくても候ひなん(中略)たとひ久しと申すともゆめまぼろしいくほどかは候べきなれば、たゞかまへておなじ佛の國にまゐりあひて蓮のうへにてこの世のいぶせきもはるけ、ともに過去の因縁をも語り、たがひに未來の化導をもたすけん事こそ返す返すも詮にて候べき云云」の御垂示を、かの壽經の「道路同じからざれば會見期無し」と想ひ合せて、同じ一つの道につながられ(上段へ)

- 一、學業より社會へ出る女性への注意
 二、就職と結婚への心がまへ
 三、結婚後の女性に與へる言葉
 四、其他

與謝野晶子

學業と社會とが一致しないといふ思想を破つてゆく事、必ず一致し得る事を信じる事。

(一)日本にありては、社會と國家とが同一のものであるといふ事をよく知らねばならないのです。

(二)國家のために就職する事、民族のために結婚する事

(三)國家の自己、自己の國家、佛教は無我なり。(座右銘)

岡本かの子

一、社會性を適度に學び探るべし。たゞし女學生たりし時代の若々しさを失

はぬやう。

新居 格

一、二、三、四の全體四を包括して、わたしは女性よ、知性的たれ、通俗的感傷に陥る勿れと云ひたいし、何もむづかしいことはない。健康で常にほゝえむ晴れた氣持をもつこと、良識はそこから湧くから。

生田 花世

一、歌をもつて答へます——
 一、み佛に花をささぐる心もて
 二、もろともにはげまし合ひて働きの
 三、つはものは力をもちてをみなでば
 私の名銘「今日を捉へよ、明日ありと信ずるなかれ(ホレース)」

高神 覺昇

他山の砥以てわが玉を磨くべしといふ言葉があるが、ヒットラー總統が政權を

とるや、全國婦人に對して「婦人は須く家庭に歸りて義務を守れ」と命令し、カイゼル當時のスローガンであつた「Kを實踐するよう」といつたことは非常に考へられることだともふ。Kとは子供と養育と寺院である。子供を産んで立派に養育し、養育で一家の健康を維持し、お寺で精神の慰安を求めるといふ三つの心構へは、たしかにわが國においても通用するスローガンだともふ。有難い勿體ないといふ宗教心の欠けてゐることは、なんといつても若い女性の欠陥です。これを新時代の女性へ贈る言葉とする。

岩野喜久代

一、學業を出たと申しても、それは人生の一礫石を置いたに過ぎません。學問にしても人格にしても、その上に一生かゝつてあなたのものである建設して行かねばならぬのですから、學校時代よりも一層の努力がいりませう。何よりもこれからの女子に望むことは視野が廣く聰明であつて欲しい。それから艱苦に堪へる強い意志をもつこと。理想と現實との衝突(古くさい言葉ですが)も

必ず來ませうが、好い加減に妥協したり諦めたりしないで徹底的にお苦しみなさい。猶この時期は思想上、信仰上の煩悶期ですからよい指導者を得ることが必要です。

二、男女が誠意をもつて協力し、責任を重んじ、建設的努力をつゞけるのでなければ、就職も結婚も失敗させよう。二、戰爭中は國家の意志に隨順して、水も洩らさぬ協力ぶりを示させよう。更に戰爭終結後に來る經濟的不安、思想の動搖に具へて激動だもせぬ覺悟を、今から養つておくことは大切です。

相馬 黒光

折角の御開合せの件につき何か申上座存居候處、正月申頃より風邪にかゝり臥床今日に至り申候。御迷惑にならぬやうもつと早く御断り致すの處、可成拙きものにてと思ひ延引いたし誠に御申譯御座なく御許し願上候。御誌「渾土」は宗教誌中一番結構と存じ拜讀致居候へば、その内今回の分の代りに何か奉仕させて頂き度候。おくればせながら右御断り申す御託迄。

俳壇

大田 耳動子



津久見 石堂 柑山生

蒲公英の蕾いだける日向かな

評 七字は早春を思はせ、下五字は中七字のあとをうけて春寒の風が吹いてゐる野か、廣庭の隅みにボツカリ日が當つてをり、そこに蕾の草を漸くもたげた位の蒲公英が光に濡れてゐる状態が思はれる。

蒲公英のやうに中央から葉の出でゐるのに對して「いだける」は平凡なやうで最も適切な表現である。原句は「たんぽぽが蕾抱ける日向かな」であるが、此の「が」は作者の氣持を強く表現するけれども、多くの場合割合しく、ぞんざいであり、浮はつてゐる等の缺點が多くそれで此處では「の」としたのである。

「抱ける」を「いだける」としたのは眼から受ける漢字のもつ意味が甚だ狭いものがあり、そして擬人法になりたがるのを少しでも避けたい爲である。俳句は日本詩であるといふ立前からも意味を取り違へるおそれのない限り假名書にしたいものだと思ふ。私は一句を作るまでに、いつも此の様な用意をしてゐるのであるから、それを諸君にもおすゝめしたい。一句一句は遺言であると云はれた芭蕉の氣持

春浅し庫裡の甕水色なくて

岡山縣新見町 山岡 瑞虎

評 日常親しきものの一つ。庫裡の甕に注ぎが行き、ふと其の水を眺めた時、無色透明のやうだつた。そして甕の底が不氣味に、はつきり光つて見えた。其れから受ける感じは如何にも春浅いと云ふのである。

此の句から、寒も去つて春爛ともなれば、さだめし水も水色となるに違ひないとも想像せられ、風情なく賛成したい。

長靴の口締め出でぬ今朝の雪

越中 藤田 四三九

評 こんな大雪は今迄降つた事はないと云ふ程度ではないが兎に角、今朝は大變な大雪である。道は勿論ついてゐないで長靴を履いて門口を一寸踏み出してみたが、もぐりさうだ。そこで雪の人らないやうに脚と長靴の口の隙間をしつかり寒いで出掛けたと云ふのである。

東京淺草 鈴木 白舟
山口縣 岡田 見智
揚舟をくぐりくぐりて初日かな
青森市 高松 秋水
寒風に向ひ波止場の小舟かな
新潟市 奥村 映水
水餅をたくはへてゐる親娘かな
豊前市 蛸江 八年坊
外燈のとりのかざれて冬の街
名古屋 鷺津 耕順
硝子瓶に梅咲かせたる指大かな
大阪市 吉廣 夏生
觸るゝ壁の冷き部屋にひとりゐる
下關 關野 公福
初御空古き港の日はうららゝ
飯田市 古川 八重子
靜かなる日筋の光り寒の鯉
福岡縣 安齋 四郎
口笛を吹いて行く子や春霞
東京淺草 鈴木 白舟
獅子をつく乙女の瞳晴れてゐる
朝鮮 墨江 八年坊
梅の花ちいさくゆれて寒雀
京都府 細木 たかし
牡丹雪帽子を脱いでうけてゐる
本郷區 新田 眞砂
照り映えて霜の雫の朝日かな
王子區 三野 輪江雪
汽車つけばスキー小舎の子おきいでぬ

石川縣 西村 謙次郎
嚴寒や鉢石楠花の葉の暗く
大阪府 豐田 邦秀
首筋にまぎるゝ雪や庭を掃く
同 馬木 花打
盆梅の散りてまつはる仔猫かな
小樽市 中村 恵
汐ひけば磯の香にあり春の風
下關市 中尾 碩翁
寒の月仲天を皎くわたりけり
横濱市 塚本 秋月
雪の驛無言の勇士迎へゐる
東京 間宮 康石
早春の光まつはり寛水
同 同 春生子
ウインドウのみな曇りゐて寒の雨
同 同 鼓月
切れ風の飄飄と空飛びてすぐ
茅ヶ崎 中里 漢水
北風吹くや巷の人の小走りに
東京 長迫 貞女
湯氣の香に故郷のザボンの雨想ふ
横濱 笠原 三三男
爪皮にうつるネオンや冬の雨
東京 奥村 将人
から風の暖簾に壽司の白くあり
岩手 多田 瑞雲
寒月や橋のはしりの増す如く
神奈川 前田 光石
雨寒く灯寒き二月かな



童話

見なかつたアブネル

中條一夫

或る夕方のこと、猶太人のアブネルはモロッコの城門の外へ、散歩に出ました。

先の尖つた帽子を被り、素末な、薄汚れたマントをはおつて、ぶら／＼と歩いて行くのでした。時々、内證で懐に藏つてある金の小箱から嗅ぎ煙草をつまみ出しては、髭を撫でゝゐます。何時も落付かないできよろ／＼邊りを見廻はしてゐる、その不安と好奇心にみちた眼付にも似合ず、今日の彼の顔付は如何にも満足さうに輝いてゐるのです。何かうまい儲け仕事があつたのでせう。

如何にもその通り、——彼は金になりさへすれば、醫者で御座れ、商人で御座れ、何にでも化けるので、今日も、不具で使ひ物にならない様な奴隷を一人誤間かして賣拂つてから、或る金持の病人に、死ぬことは請合つても、治すことは請け合へないと云ふ大した煎藥を調合してやつて來たばかりなのです。

今しも彼が棕櫚と椰子の小さい森を抜け出ようとした時、自分の後にこちらへ駈けて來る人々の騒がしい喚き聲をきゝました。それは王様の馬丁共

の一群で、その先頭には主馬頭が立つてゐたが、いづれも何か捜し物でもしてゐる様に落付かない目附で通りをきよく見廻してゐるのでした。

『バリサイ人よ！』と主馬頭がせき込んで彼に呼びかけました。『お前は此處へ馬具をつけた馬が馳しつて行くのを見なかつたか？』するとアブネルが答へました。

『あれは仲々駿馬ですね、蹄は小じんまりとしてゐて、蹄鐵は十四銀、それにたて髪はお寺の大燭臺のやうに金色に輝き、丈は七尺位尾は三尺五寸、馬銜の棒は二十金で出来てるので御座いますな。』

『それがさうだ！』と主馬頭は叫びました。

『それがさうだ！』と馬丁共も一齊に叫んだのです。

『それがエミールだ！』と年老いた調馬師も叫びました。

『俺は、アブダラ王子に何處も申上げたのだ。エミールの手綱はもつと引締めてお乗りにならなければいけません、と。俺はエミールを

知つてゐるから、王子がほりり出されるだらうて云ふ事も前から解つてゐた。そして王子が御脊を痛めたら、俺の頭でその差引きをせにやならなくなるだらうて云ふ事も解つてゐたのだ。で、馬は何つちへ走つて行つたのかね？』

『でも私は馬などはまるきり見ませんでしたよ。』とアブネルは笑ひながら答へました。

『王様の馬が何つちへ走つて行つたか、私に解るものですか？』

このとんちんかんな返答にあきれた馬丁共は、アブネルにもつと突込んで聞かうとしたのですが、恰度其時また別な事件が持上りました。

かう云ふ偶然も時たまはあるもので、恰度この時、女王様の御寵愛の臘犬がまた逃げ出してしまつたのでした。そしてそれを捜しに出た黒ん坊の奴隸の一隊が、この場へ通りかかつて、遠方から叫びかけました。

『あなた方は女王様の臘犬を見かけなかつたかね？』

『あなた方の捜してゐるのは牝犬ではありませんね。それは牝犬でしより。』とアブネルが云つた。

『その通りだ！』と黒ん坊の先頭に立つた執事頭が云ひました。

『その犬は臘犬ですね。』とアブネルは續けました。『垂耳で、巻き尾で、右の前足が跛です。』

『そつくり、そのまゝだ！』と奴隸共は一齊に叫びました。『それがアリーネだ。女王様は彼が居なくなると氣を失はれてしまつた。アリーネ、お前は何處にゐるのだ！ お前をこの腕に抱へずに王宮に歸つたら、俺達は一體どうなることだ！ お前は何處でアリーネの走つて行くのを見たのだ？』

『私は犬なんぞまるつきり見ませんでしたよそれに女王様が臘犬をお持になるなんてことも知らなかつたのですからね。』

臘と王宮の人達は、王様の持物を弄つてゐるやうなアブネルのこの厚顔しさに、すつかり腹を立て、しまひました。それに彼の云ふ

ことが全く事實に合つてゐるので彼が馬と犬を盗んだのに違ひないと思ひこんでしまひました。他の者共にはなほも搜索を續けさせながら、主馬頭と執事長はそのユダヤ人を縛つて、半ば人を買つたやうに、半ば心配氣にニヤ／＼してゐるアブネルを王様の御前に引出しました。

王様のイスマエルは、委細をお聞きになると御立腹になつて、直ちに宮廷裁判をお開きになり、事の重大さに自ら裁判長におなりになりました。

先づ自白させる爲に、被告人は足の裏を轡で百たたくことを宣告されました。アブネルは喚いたり、悲鳴をあげたり、自分の無罪を誓つたり、事の起りを詳しく説明させてくれと嘆願したりしました。「王の不興は若き獅子の咆吼の如きも、その慈愛は草の葉の露の如し」とか、「眼と耳と閉ざされたる時に、手を以つて撃つことなかれ」とか、ユダヤの諺を叫んだりしました。けれども、馬と犬の再び返つて来ない場合にはアブドラ王子の御負

傷と、女王の氣絶とを、このユダヤ人の首で轢はなければならないと、王様は宣告を下しました。

アブネルの悲鳴が宮殿一ぱいにこだましたその時に、馬と犬が見付かつたと云ふ知らせがまゐりました。犬のアリーネは王宮に住む身分なのに、普段あまり附合つたことの無いちんころの仲間に入り込んでゐたのを見付けられたのです。

そして馬のエミールは、駆け疲れた後で、タラ川の岸邊の青芝に生えてゐる香のよい草の方が、宮殿の槽よりも、ずつと甘味いことが解つて、そこで、しきりに草を食べてゐたのでした。丁度それは獵に出て道に迷つた貴族が樵夫に與へられた黒パンとバターに、日頃の種々の御馳走の味も忘れて、むしやぶり付いたやうなものだつたのです。

ところで、イスマエル王はアブネルがどうしてあの様な事を云つたのか、その説明をお求めになりました。

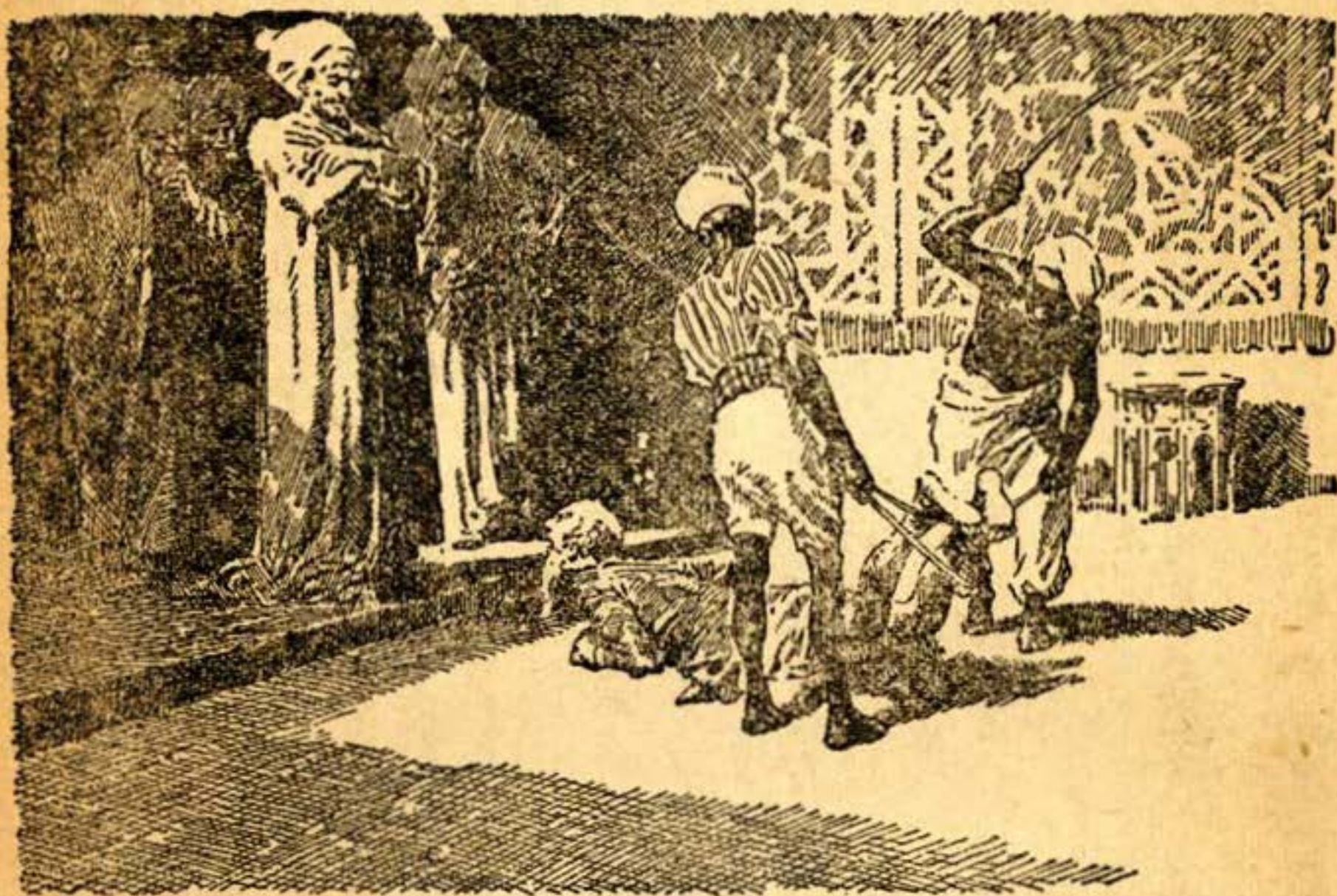
「私は神明に誓つて申し上げますが、あなた様

のお馬と女王様御寵愛のお犬を、この眼で見ただ譯ではございません。どうしてあの様に申したか、まづその理由をお聞き下さい。

私は、一日の仕事の疲れを休めるために、何も考へずに森の中を散歩してをりました。その時に、主馬頭と執事長さまにお逢ひしたので御座います。と、私は奇麗な砂の中に一匹の獸の足あとを認めました。獸の足跡を良く存じてゐる私は、直ぐにこれが小さい犬の足跡だと解つたので御座います。また足跡の間の凸凹した砂の上に長い條が付いてゐるのを見て、これは牝犬に違ひないと感付いたので御座います。と申すのは、長い乳首をたらしめてゐた、その跡に違ひないからで、それ故にまた成犬であるとも考へたので御座います。すると足前のわきの砂が軽く跳ね除けられてゐる跡を見て、垂れた長い耳を持つてゐるのだと考へたので御座います。すると又長い間隔を置いて處々砂がずつと、ひどく掘返へされてゐるのに氣が附きました。で、私はこの小犬は、長い固い尾を持つてゐて、時々

それで地面をたゞいて行く、くせがある巻尾の犬に違ひないと。それから又前足の片方が、砂の中にひどくめり込んでゐるのをも見逃さなかつたので、甚だ僭越ながら、女王様の小犬は跛であるとお察し申したので御座います。

王様の駿馬に就きましては、森の中の叢の中を歩るいて行きますと、馬の足跡を見付けたので御座います。私はあの小ぢんまりした蹄とその強い蹄跡を見るや否や、心の中で思つたので御座います。これは最も優れた、チェンナー種の駿馬であらうと。四ヶ月程前に、王様がフランスの大公にこの種の馬をお賣りになつて、大分お儲けになつたと聞いてをりました。その上に私は、その足跡の巾が廣く、しかも規則正しく付いてをるのを見て、考へたので御座います。これは美しく立派に驅ける馬だ、これだけの馬を持つてをるのは王様だけであらうと。尚私が身



をかゝめると、地面に何か光るものが見えたのです。それは小石で御座いました。その上を走つて行つた駿馬の蹄が打ちつけて行つたもので、それで私は蹄跡が十四個で出来てゐると認めたので御座います。私は一寸こすつただけでどんな金属でも本物か偽物か解ります。またその並木路は七尺位の幅で御座いましたが、處々兩側の棕櫚の葉の埃が拂ひ落されてゐるので御座います。その馬が尾で拂ひ落して行つたのだとすると、その尾の長さは三尺五寸はあると、かう考へました。地上から五尺程の樹の枝の葉が新しくむしり取られてゐるので、その馬が馳て行く時に背でこすり落したのだと考へて、七尺の丈のある馬と推察したので御座います。またその同じ樹の下に一房の毛が落ちてゐましたが、それが金色ではありませんか。そして私が叢から出ると傍の岩壁に付いてゐる一筋の

金の線が目についたのです。それは馬術の練が觸れたのに違ひありません。華手好きな王様は御自分の馬に金の馬銜を嚙ませたに違ひないと存じまして……」

これをお聞きになつた王様は、アブネルの鋭い觀察力に感心なさつたのですが、

「お前の足裏は未だ五十しか打つてをらなかつた。百打つ筈であつたのだから、残りの分として、五十金拂ふが良い。そして今後は王様の持物を弄るやうなことをせぬやうに誓つたがよい。」

と宣告を下されました。アブネルは濫々五十金の罰金を拂つて立去りましたが、宮廷の人は彼の優れた眼力には全く驚いて仕舞ひました。

それから程へたある日、アブネルはまた、アトラスの山の麓を散歩してをりました。すると、數十名の軍人が彼の方に駈けて來るのに出逢ひました。

「おい、兄弟、王様の奴隷のゴロが此處を通るのに逢はなかつたか？ 奴はどうもこの方

角に逃げて來たに違ひないのだが」

と軍人は彼に訊ねたのです。アブネルは

「さあ、私には解りませんね」と答へました。

「あゝ、お前は馬と犬を見ずに云ひ當てた猶

太人だな。どうだ、あれ程のお前だからこの

空氣の中に奴隷の汗の臭ひを嗅ぎ分けられる

だらう。この草の上に奴の足跡を見付け出せ

るだらう。奴は吹矢の名人で王様の大事な遊

ひ道具だ。さ、云つて呉れ、何つちへ行つた

か！ それとも云はずに縛られたいのか？」

「でも、私の見ないものを、見たとは云へま

せんよ」

「云へないことはあるまい。でないと、また

足裏を撃れるぞ！ また罰金だぞ！」

「こりや驚いた。でも、貴方がどうしても私に

吹矢の名人の逃げた方角を云へと云ふなら、

あつちか、それでなければこつちですよ。」

「ではお前は奴を見たのだな？」

「よろしかつたら、さう云ふ事にして置きま

せう」

軍人達は急いで指さした方角に駈け出し

ました。アブネルは自分の機智にすつかり良い氣持になつて家に歸りました。ところがその夜の明けない中に、彼の家へ數人の軍人が踵り込んで來て、また宮廷へ引つ張り出されました。

それは、逃げた奴隷が彼の教へたのとは反対に海岸の近くで捉へられたので、彼が出駄羅目を述べたと云ふことが判つて仕舞つたのです。そこで、彼はこん度は足裏を百打たれ百金の罰金に處せられたのでした。

彼が濫々罰金を拂つて、しよんぼりと王宮の門を出やうとすると、顔染みの王宮の道化師が彼をよび止めて云ひました。

「おい、アブネル。王様にあれだけのお手數をかせさせたお前も相當なものだよ。だがね、若しこれから罰金を拂ひ度くなかつたら、他に少し酒手を出しておきなよ。さうすれば、宮廷からまた何か逃げ出した時には、早速お前に知らせてやるぞ。その時には、お前は家へ逃げ込んで、内からしん張り棒をかつておくんだな。」

(をばり)

法語
解説

かりそめの戀にも

法然上人詠歌

中村 辨 康

かりそめの色のゆかり戀にだに

あふには身をもをしみやはする

(勅修御傳卷三十)

如來への聖愛

人間に取つて戀ほどやる瀧ないものはなく、また人の心を眞
鍔ならしむるものはないやうです。

本能の命ずるところと云つて仕まへば、味もソツケもありま
せんが、それにしても命まで惜しまないと云ふのですから、本
能的に一番大切にして居る生命をさへ超越した強い力を持つて
居るものであることは云ふまでもありません。

ですが、廣い意味での人間の戀には概ね三つの段階があると
存じます。

一、本能的な異性への戀。二、藝術的な美への戀。三、宗教
的な聖なるものへの戀。

普通に「戀」とさへ云へば「異性への戀」に限られて居るや
うですが、藝術家が美にあこがれて顔色憔悴、實に見るも憚れ
にやせおとろへて、本當に人目には「戀煩ひ」でもして居るの
ではないかと思はれる程に眞鍔になつて、自分の理想に盡かれ
た「美」の表現に浮身をやつして居たと云ふ話しも、古來から
かなり澤山云ひ傳へられ云ひ残されて居ります。

これらの「命に替へて」も一代の傑作を残さうとした人の話
しを聞きますと、單に創作欲と云ふ言葉で片付けてしまつては
誠に勿體なく相すまぬやうな崇高な感激に涙をさそはれます。
まさしく其人に取つては感情的には「戀」とでも云はなくては
云ひ切れないものであつたであらうと察せられます。

然しそれにもまして一層崇高なる「戀」は宗教的な憧憬だと存じます。

或る人は「信仰は戀愛の變形」だとさへ云ひました。それは一面宗教を喰しめて居る意味であるかも知れませんが、他面に確かに信仰、感情の上から、さう云つて云へない事もないふしがあると思ひます。

ウヰリアム・ゼームスの「宗教経験の種々相」の中に擧げて居る幾多の例は、餘りにも極端であり且つ「變態的」なものが多しやうであります。そしてそれらは多く獨身者の禁欲生活をして居る狂信に近い状態であつて、健全な信仰とは見做し得ないものですけれども、其程度は低く卑しいにしろ本當にあくがれの感情が激して來ますと、さう云ふ熱狂的な氣持さへ出て來るのですから、其の感情が濃いか薄いかは暫く別として「宗教的憧憬」としては確かに一種の戀心に似たものを感じて、命もいらぬ氣持にまで誘導されるものです。

宇宙の眞相を諦観せんとして「身命をも惜しまない」氣持はまさしく崇高なる「戀心」でありませう。

つまり宇宙の眞相を諦める爲には、たとへ瞬間でも「如來」に見え「如來」に觸れ「如來」に逢ひたい、と念願するのですし、それが一番宗教の核心を握む方法でもあるのです。

哲學的な検討に依る眞理確證の方法は私達には今の處に合ひませんし、餘程頭のいい學者でも本當に満足し得るところまで達し得られるか何うか分らないのですから、先づ私達には縁が遠くて手が届かないものと思はねばなりません。

然るに宗教上の信仰では、特に私達に縁の近い淨土教では、「念佛」と云ふ至極簡單な方法が明示されて居ります。

「南無阿彌陀佛」と如來を念じて行くこと、それは「如來」に直接せんとする行動なのです。そして此の「念佛」の宗教感情が徹底すれば一瞬にして「如來様」に直參し得られる筈のものであります。

此のあくがれ、此の憧憬に依て、私達の宗教感情はいよいよますます高調して來て、一種の「戀情」にも似た強い高鳴りを響えます。法然上人の「夏の歌」に

われはたゞほとけにいつかあふひぐさ

こゝろのつまにかけぬ日ぞなき

と云ふのがありますが、心のつまに何時でもかゝつて居る氣持こそ、崇高な宗教的戀心ではないでせうか。

世には「一目惚れ」と云ふやうな事もあります、宗教的素養のない私達には「一目惚れ」する程の力はありません。

何遍も何遍も逢つて段々に色を増して行くだけです。

法然上人の「秋の歌」の

阿彌陀佛にそむる心の色に出ては

秋の梢のたぐひならまし

と云ふやうに、段々に心が染まつて漸くに如來を憧憬することゝろが深くなつて行くのです。

一日で染まるか一年で濃くなるか、それは今の處私達自らが計量すべき問題ではありません。私達としてはひたむきに唯だ如來様に染まつて行きさへすればよい譯です。

深草の少將は小町の處に九十九夜通つて百日目にこゝえ死んだと云ふことですが、果敢ない人間の異性への戀でさへ心を盡くして魂まで切り切らせて仕まつのですから、人間に取つて一番崇高な宗教的聖愛に身命を捧げ、そしてその身命を捧げることに依て、本當の「胸のすくやうな」光輝ある人生を完うし得るならば、どの位幸せか分りません。

われはたゞ佛にいつか葵草

心のつまにかけぬ日ぞなき

かゝる如來への聖なる思慕は、並大抵な宗教感情ではないと存じます。

飾らない純情

聖道門の教へでは煩悩の盡くする凡夫の身では到底佛に遇ふことは出来ないと言つて居ます。

無垢な明鏡のやうな心境に達して初めて得られることだと云つて居ます。

するどい理智で正面から押して行かうとして居るのです。堂々と表玄関から面會を求めようとして居るのです。

だが、それはチャンと資格を調へて行かねば駄目です。身なりも肩書も調つて居ないことには恐らく玄関ばらひを喰はされることとせう。若し乞食のやうななりでは玄関はおろかのこと門内へも入れて呉れませんまい。またよし身なりだけは借着かなんかで調へて行つても言葉づきや風貌などで無資格を觀破されたら是れ亦た駄目です。

だからそれよりも裏所の裏口から有りのまゝの人情でぶつかつて行く方が手取り早いです。人情となれば貴賤貧富の別はないのですから、純情な誠意なら、どんな人でも動かし得る筈であります。それが「浄土門」の行き方です。

つまり如來様へ親しんで行く行き方です。親に對するやうななつかしみですがつて行くのです。

「臉の母」への思慕です。

大原問答の時に法然上人が言はれたと云ふ、

一人をして欣慕せしむるの教門は、しばらく淺近に似たりと雖も、自然悟道の密意は極めて是れ深奥なり」

と云ふ御言葉のやうに、理智的な表玄關から行く事から見れば極めて淺い卑近なやうに見えますけれども、目的達成の上からすれば誠に是れ實際的な捷徑で、此處に萬人に通ずる宗教感情の深密な機微があると存じます。

楞嚴經の中に「勢至圓通章」と云ふ一節があります。其は

「譬へば、二人の人があつて一人は他の一人を常に憶つて居り、他の一人はすつかり忘れて居るとするならば、永い間には機縁に依て或は逢ふこともあらうし或は逢はぬかも知れないから何とも斷定は出来ないが、若し二人共に互ひに相憶りて慕ふならば、恰度影の形に添ふごとく幾度生をかへても離れることはないであらう。如來が衆生を憐念したまはふのも一人の母親が一人の子を憶ふやうな状態に似て居るのである。若し子供が不孝者であつて母親から常に逃げ廻つて居るならば何うしやうもないけれども、其子が心を改めて母親を慕ふこと、あだかも母が子を憶ふやうな心であるならば、其親子はたとへ生をかへるとも相離れることはあるまい。それと同じやうに若し衆生が一心に如來を憶ひ佛を念するなれば、今か後かの差はあらうとも、必ず佛に逢ひ佛を見ることが出來

そして何の手段をからずに、おのづから明るく心が開けるであらう。それは譬へて云へばよい香に浸みた人には香氣があるやうなものである。だから之を名付けて香光莊嚴とも云ふが、之は私が修養時代に日月光佛と云ふ佛から教へられた念佛三昧の法なのである」

と云ふので、法然上人の云はれた自然悟道到達の機微を卑近な人情に合せて表現したものであります。

私の知つて居る或る信仰深い方は嘗て次のやうなことを云つて居りましたが、誠に味ふべき言葉だと思ひます。

「愛と云ふ感情は實に不思議なものであるが、何うして凡ての生物に此感情が賦與せられたのであらうか、考へれば考へる程不思議である。之は單に種族保存と云ふ吏の意味ぐらゐではまだ本當に盡して居るとは思へない。強いと云へば「愛は生命を保護する天使だ」と云へないこともないと思はれる。實に愛こそは生命の根源だと思ふ。本能的にも凡ての生物は我が身を愛し命を愛して居る。若し私達人間に身命を愛する心が無くなつたら屹度自殺するに至るであらう。そして異性を愛する性情がなければ子孫が絶えてしまつて人類は滅びするに至るであらう。更に進んでは國家を愛し民族を愛する。之は人間のみに與へられた理性的な愛であるが、若し之

の愛がなかつたら國家の生命や民族の生命が亡びてしまふ譯である。そしてまた學者に知識を愛する感情がなかつたら、高尚な學問も、文化の發展も、そして正しい眞理の教も世間に起らなかつたかも知れない。更に一層進んだ愛としては、偉大なる哲人聖人が天地の眞理を神又は如來として我が生命をそれに捧げ、その闡明發揚に自分の一切を犠牲にしても敢へて惜しまない偉大の愛である。かく見れば、人間は其人の思想が低く卑しければ其低く卑しい程度のものを愛して生きて行き、思想が高く清ければそれに應じて高く清いものを愛して生きて行くのである。だから高い低いの別はあつても愛は直ちに其人の生命だと云はれ得ると共に、出来るだけ高い聖愛に生きるやうにしなければ、本當に光輝のあるそして本當に幸福である人生を完うすることは出来ない」と云つて、宗教的聖愛の信仰に生きることこそ、最も美しい人生であることを力説されたのですが、之に依ると私達の現に持つて居る愛の感情が、何に依て最も強く動きつゝあるかと云ふことで、一種の人格檢定のバロメーターにもなる譯であります。

私達の「淨土」を希念する氣持は、無論「淨土」が樂しみ極まりなしと云ふ極樂だからと云ふのではなく、その「淨土」の主である如來様の大慈悲に目覺めて「永遠に盡きせぬ命」と、

「光輝ある正しき進展」とを獲得したいのでありませう。して見れば最も高尚な神聖な愛即ち信仰に生きることこそ、最も強く最も深く望んでよい譯です。

そしてその達成の爲には此の捨て難い肉體的な小生命を捨てゝも敢へて惜しくない氣持にまで高められてもよい譯です。即ち通常では到底出來得なかつた「我」を破ぶることが其處に苦もなく體驗されて行きます。そして苦もなく「直入如來地」の大悟の境地にも達せられます。

小我を捨てる大乘精神

國民精神總動員も、結局は此超非常時を乗り切るべく國民全體の「沒我的大犧牲精神」に目覺めることを要望するものです。が、本當の信仰に依つて「無我」の實相に直參しない限り、本當の「滅私奉公」の大覺悟は確立し切れないのではないかと思ひます。

口では色々云ひますけれども、銃後の國民が「生活」の全部を捧げる氣持になり切れるか何うか。好むと好まぬとに拘らずに、生活的には愈々益々窮乏を告げる譯ですから、下手にまごつくつくと、永い間には國家の重大事を忘れて利己主義的な氣持から怨嗟の聲が起らないにも限りません。さうなると老獪な外國

政治家の思想戦術が魔手を延ばして、一層國家的危機をかもし出すやうに國民思想の攪亂を謀るでせうから、實に國家的見地から云つても、此際國民の確乎たる信念覺悟が緊要な譯です。

現状のまゝですと、殆んど云つてよい程、個人主義に馴らされて無我的な大乘精神を把握して居ないのですから、實に寒心に堪へないものがあります。

だからどうしても此時此際私達は一人も多く眞實の信仰を得て頑固な小我執着の氣持を破らなくてはならぬと存じます。

口先ばかりでなく本當にそれを實行し得る人が多くならなければ、此重大時局を乗切ることとは出来ないと思ひますから、是非此の無我的な大乘精神を端的に涵養し得る淨土教の信念に生きて欲しいものと存じます。

かの源平争亂の時代に、國民の歸趨が見失はれて極度に人心が動搖し、政治も宗教も之を何うしようもなく、徒らに混亂に混亂を重ねて居た時、あだかもよし宗教的天才である法然上人が現はれて新佛教運動を起され、さしもの動搖して居た人々の心が、またゝくまにピタツと鎮定して、上は政治の中樞に居る公卿公家を始めとし、急速に擡頭して來た新勢力の武士や其他一般庶民乃至は女子供に至るまで、あらゆる階級の人々が、大旱に雲霓を望むが如く法然上人の新念佛主義の傘下に集つた

やうに、此の非常時局に處するには、再びこの法然上人の宗教を再認識する必要があるのではないかと、痛感いたします。

現代は一偉人の出現を待つ時代ではありません。萬人協同の時代です。億兆一心の時代です。

この貴賤賢愚僧俗の別なく一致協力する時代に於て、僧俗貴賤賢愚の別を顧慮しない法然上人の念佛主義を再検討して、其純正なる信仰に立つて以て確乎たる大乘精神を樹立しなければならぬと思ひます。

それは決してむづかしい事ではありません。宗教的聖愛に我が心を馴致してさへ行けばよいのです。

そして其馴致の方法はと云へば「念佛」することだけでよいのです。

ちつともむづかしい事はありません。

念佛に誘はれて行くだけでよいのです。

毎日僅かな時間を割いて念佛して見て下さい。屹度段々明るい心になつて行きます。そして段々信仰の深い味ひを味つて本當の喜びに感謝感激する時が参りませう。そして人間の中で最も崇高な宗教的聖愛を體驗することにもなります。

そして此時最も高い「日本精神」の眞價を體驗し得るでせう。

信仰の再認識の上にも一番大事な事です。

會員の聲

北支・福榮部隊本部・西生

遙に御稜威八紘に浴き新春に當りて、貴會の隆盛を賀す。昨年は戰塵の間に心の糧としてよき安心を與へられ感謝に堪へず。戦氣に荒ぶ猛々しき心の中に安心と慰安を與ふるものは貴誌にて、げに佛天の來迎の如く常に小官が心に愉悅をたゞえしめたり。本年頭號、中村氏の「佛教による民族の覺醒力」は小官の言はんとする處を言ひ得て、誠に共鳴する處なり。直ちに部下の精神教育資料として實施敷衍せり。この種の記事は難解なる語句をさけ、平易に講述し、大衆の胸底に自己の信奉する宗教の對國家性如何を認識せしむ。平凡且つ拙劣なる讀物の掲載は止められたし。最近小官は在支某宗教團體の研究とこれが利用を命ぜられあり。若し餘白あらば乞うて記載を求めん。尙北支蒙境方面に所用あらば讀者の便に資せんとす。乞ふ申込を。遙に北の方、陰山の山脈を望めば雲漠々たり。戰士皆士氣旺盛、年頭遙に聖壽の萬歳を叫ぶ、また壯なるかな。

北支・山口部隊・藤原聖

北支の空も寒氣は一入厳しくなつて参りました。銃後の後援に一方ならぬ御盡力を賜はり實に有難く厚く御禮申し上げます。御惠送の慰問袋有難く淨土もうれしく拜見致しました。死なば淨土、生きたらば故郷の此の幸の身を重ねて有難く感じます。

北支・山下部隊・原田輝治

お菓子も鑑詰も何一つとして有難くないものはないが、とりわけ法然上人の冊子(淨土)を有難く尊く深い印象を心底に與へた事でせう。

北支・馬場部隊・垣見周瑞

餘暇を得て史上名高き邯鄲城壁上に登り阿彌陀經並に元祖法然上人の遺誡を讀誦いたし佛天の加護に對し御禮申し上げます。

支那の地は佛教渡來の地、殊に善導、道綽教化の地として我々淨土教徒によつて見るもの聞くもの注意の的となるのでありますが古の盛大を思はせる寺院、佛閣は兵營に化する等荒廢涙をそゝる様な状態であります。邯鄲城内の佛堂に「軍人必修箴言」として

入境而知其國之隆替、入門而知其家之興衰、家國如此、軍隊亦然……と大書してありますが、誠に佛教を如斯状態に陥れた南軍並に

舊軍閥政權は當然に衰亡の道を辿るべき運命にあつたのであります

北支・長澤部隊・松尾甚太郎

「淨土」有難く佛縁の導きをよろこんでをります。寝る時起きる時はなべるく神、佛、郷里の父をお祈りし念佛を忘れぬ様にしてみますが淨土を讀みまして益々念佛を申す積りでをります。

神奈川・植村漢子

嚴びしい冬も終りになつて、もうそろ／＼春のぬくもりが感ぜられます。國家の非常時局に、法然上人鑽仰會も愈々充實した歩みを續けてをられる事と嬉しく存じ上げます。

毎月の雜誌「淨土」も待ち遠しく、いつも早速に讀み通してをります。都會を距たつた田舎に住んでをりますと、自然に文化の惠を受ける事も少く、「淨土」一冊が月々の心の糧と喜んでをります。其の日／＼の仕事を終へて、夜なぎさに打ち寄せる波の音を聞きながら、靜かに雜誌の頁をめくる時の喜びは、本當に嬉しい限りであります。

近頃の私共の村からも、雄々しく支那の戦線に馳せて御國の爲に闘つてをられる將士を多数出しま

して、毎日其の方々のうはさで持ちきつてをります。

比較的に教養の少い村の人口には、支那事變に就いても時々誤まつた認識を持つてをられる様に見受けられてなりません。國家でも國民精神總動員で種々銃後國民の精神的な思想的訓練を重大視してゐる折柄、鑽仰會におかれまして、本當に國民の行く處を知らしめて頂き度う存じます。

もう何時の間にかお彼岸も近づきまして、海には白帆が陽光にはえ、野原には愛らしい雲雀のさえずりが聞かれる事で御座います。

來る春に、のどかな喜びを感じると同時に、深く／＼日本の大きな動きを感じられてなりません。其の昔、上は上皇を始め奉り、下は海女漁人に迄御慈光を下されたと言はれる法然上人の御人格は、今も尙私共の心の中に生かされなければならぬもので御座います。

古しへの偉人の足跡を、今靜かに忍び申し上げると共に、益々充實した其の日／＼の生活を願つて切なるものが御座います。唯廣大無邊の御佛の御導きをお願いするのみで御座います。

編輯後記

中にその影響力を強化し、確保すべき觸手の一つである。編輯子

この種の隨筆は「淨土」ならでは見られないものです。

もうつかりしてはゐられぬわい。今までもとてもうつかりしてゐた譯ではないが稍々庶幾だ。

◆なほ、皇軍と困苦を共にしつつ、聖戦の辛酸をなめ盡されてゐる淨土宗從軍僧の方々の御寄稿は他の現地報告とは別な感激を讀者にお贈りしたと信じます。中野氏白崎氏の他にも淨土宗から從軍僧は多數戦線に活躍されてをりますので、順次それ等の方々の報告を掲載し、戦争と宗教とが現地に於て如何に實際的に結び付いてゐるかを知つて戴きたいと思ふのであります。

◆と、校正の赤ペンを置いて私はひとり語を云つたのである。

◆小説、讀物では今野賢三氏、小島健三氏、飯田光明氏と新進氣鋭のつはもの共を揃へました。今野氏の「靜御前」は來月で完結、續いて、飯田光明氏の「住蓮と安樂」の續編を連載する筈であります。御期待下さい。

◆「淨土」は念佛信仰が國民の

◆今月は隨筆陣を強化して、吉田綾二郎、子母澤寛、岡本かの子の諸先生の御寄稿を得たことは本誌のいさゝか得意とするところであります。口はゞつたい様には聞えませうが、信仰にみちあふれた

○春は馬車に乗つて……どころか、春の波に乗つて儼しい現實が全國民の目の前にいよゝ迫つて來た。巨大な軍事豫算、増税、物價騰貴等々。日本國民の大試練の時期が本當にやつて來た。こりや春だ、春だと陽氣な氣分ではしやいではゐられぬぞ。暖い春日の影には、いかめしい現實の青鬼、赤鬼が、試練の双を冷たくとぎすましてゐるのだ。

の分で行くと、近日中に豫定額を遙かに突破しきうな素晴らしい反響振りに、宗務所、鑽仰會の感激は勿論末席を汚す私も感激に涙したのであつた。

「淨土」購讀規定
一部 定價 金十錢
(送料一錢)
一ケ年 金一圓
(送料不要)

○國民精神總動員！ 凡ゆる困苦に耐へ得る強固な精神力、萬邦に冠たる精神的統一力を持つ日本國民は、この時代にこそ、その本當の力を世界に示さねばならない。その國民の精神的基調の一をなす佛教が、その實力を發揮すべき時も今であると思へば、われらも武者振ひを禁じ得ない。

右の一ケ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「淨土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

右の一ケ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「淨土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

◆「淨土」は念佛信仰が國民の

右の一ケ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「淨土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

右の一ケ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「淨土」が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三年二月三日印刷納本
昭和三年三月一日發行

定價 十錢

編輯兼 眞野 正順

發行人 赤尾 光雄

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園四丁目一ノ二

振替 東京 八二一八七番

絶好の

布教用書

法語例

(一七) わが浄土をたつる心は凡夫の報土にむ(生)まるゝことをしめさんがためなり。

(二〇九) 酒飲むは罪にて候か。答。まことには飲むべくもなけれども。この世のならひ。

(二二五) 子産みて神佛へまいる事百日はばかりと申候はまことに候か。

答。それも佛法にはいま(忌)す。

(二三四) 出家は若きと老いたるといづれが功德にて候。老いては功德ばかりえ候。若きはなをめでたく候。

私たち
の今なやん
でゐる問題を法
然上人は己に八百年
の昔に悩んでおられた。
そして迷信的、偶像的宗教の
是正改革を叫んだのが祖師であ
つた。
西にルーテル東に法然と稱せらるゝ所以
である。法然上人の句々言々悉く時代への關
心が波うつてゐる。

本書整備内容 (藤井實應編)

○道を求む ○新しき救ひの道 ○本尊 ○安心 ○念佛
○生活 ○社會 ○和歌 ○法然上人の略傳

法然上人法語抄

發行所

法然上人讃仰會

定價 三十三六錢

送料共 クロース装
菊半截一三〇頁

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十三年二月廿日印刷納本 昭和十三年三月一日發行

浄土第四卷 第三號

定價 金十錢 (送料)
滿鮮臺等 金十一錢 (送料)
外地定價 金十一錢 (送料)